松江市文化財調査報告書　第90集

文化財愛護
シンボルマーク

奥山古墳群発掘調査報告書

2001年9月

松　江　市　教　育　委　員　会
財団法人　松江市教育文化振興事業団

奥山古墳群出土遺物

奥山古墳群付近（上空より）

図　版　目　次

巻頭１　奥山古墳群出土遺物
巻頭２　奥山古墳群付近（上空より）
図版１　［上］１号墳調査前全景（南東より）
［中］１号墳主体部検出状況
［下］１号墳主体部土層断面
図版２　［上］１号墳主体部完掘状況
［中］１号墳土師器：坏出土状況（左下）
［下］１号墳土師器：坏出土状況
図版３　［上］１号墳完掘状況（北より）
［下］１号墳出土土師器：坏
図版４　［上］２号墳調査前全景（北より）
［中］２号墳主体部検出状況
［下］２号墳主体部土層断面
図版５　［上］２号墳主体部完掘状況
［中］２号墳墳丘東側土層断面
［下］２号墳完掘状況遠景（北より）
図版６　［上］３号墳調査前全景（南より）
［中］３号墳主体部検出状況
［下］３号墳鉄製品出土状況（鉄剣・鉄鏃）
図版７　［上］３号墳主体部土層断面（南北）
［下］３号墳主体部土層断面（東西）
図版８　［上］３号墳主体部盗掘擴完掘状況
［中］３号墳主体部完掘状況
［下］３号墳西側墳裾土層断面
図版９　［上］３号墳完掘状況遠景（南東より）
［下］３号墳完掘状況近景（南東より）
図版10　［上］３号墳墳丘基盤（南東より）
［下］３号墳出土鉄製品：鉄鏃
図版11　３号墳出土鉄製品：鉄剣
図版12　［上］ＳＸ－01検出状況
［中］ＳＸ－01完掘状況（北北西より）
［下］ＳＸ－01完掘状況（南より）
図版13　［上］４号墳調査前全景（南より）
［中］４号墳南側の溝検出状況
［下］４号墳南側の溝完掘状況
図版14　［上］４号墳完掘状況（南西より）
［中］５号墳調査前全景（南東より）
［下］５号墳主体部検出状況
図版15　［上］５号墳主体部土層断面（東西）
［下］５号墳主体部土層断面（南北）
図版16　［上］５号墳土師器：直口壷出土状況
［中］５号墳鉄剣出土状況
［下］５号墳刀子出土状況
図版17　［上］５号墳　鉄剣、鉄鏃、石出土状況
［下］５号墳主体部完掘状況（北東より）
図版18　［上］５号墳墳丘北側土層断面
［中］５号墳墳丘南側の溝土層断面
［下］５号墳墳丘南側の溝検出状況
図版19　［上］５号墳完掘状況遠景（南より）
［下］５号墳完掘状況近景(南東より）
図版20　［上］５号墳墳丘基盤（南より）
［中］５号墳小土壙検出状況
［下］５号墳小土壙完掘状況
図版21　［上］５号墳出土土師器：直口壷
［下］５号墳出土鉄製品
図版22　５号墳出土鉄製品：鉄剣
図版23　［上］６号墳調査前全景（南より）
［中］６号墳南側の溝検出状況
［下］６号墳南側の溝完掘状況
図版24　［上］６号墳墳丘西側墳裾完掘状況
［中］６号墳完掘状況遠景（南より）
［下］６号墳完掘状況近景（南東より）

挿　図　目　次

第１図　松江市位置図 …… 1
第２図　奥山古墳群位置図 …… 1
第３図　奥山古墳群と周辺の遺跡 …… 2
第４図　運動公園造成前調査地付近地形測量図 …… 5～6
第５図　奥山古墳群調査成果図 …… 7～8
第６図　奥山１号墳・２号墳調査前地形測量図 …… 9
第７図　奥山１号墳調査成果図 …… 10
第８図　奥山１号墳墳丘土層断面図 …… 11
第９図　奥山１号墳主体部実測図 …… 11
第10図　奥山１号墳出土土師器：坏実測図 …… 12
第11図　奥山２号墳調査成果図 …… 13
第12図　奥山２号墳墳丘土層断面図 …… 14
第13図　奥山２号墳主体部実測図 …… 15
第14図　奥山３号墳調査前地形測量図 …… 16
第15図　奥山３号墳調査成果図 …… 17
第16図　奥山３号墳墳丘土層断面図 …… 18
第17図　奥山３号墳主体部実測図 …… 19
第18図　奥山３号墳出土鉄製品実測図 …… 21
第19図　ＳＸ－01付近調査成果図 …… 22
第20図　ＳＸ－01実測図 …… 22
第21図　奥山４号墳・５号墳調査前地形測量図 …… 23
第22図　奥山４号墳調査成果図 …… 24
第23図　奥山４号墳墳丘土層断面図 …… 25
第24図　奥山５号墳調査成果図 …… 26
第25図　奥山５号墳墳丘土層断面図 …… 27
第26図　奥山５号墳主体部実測図 …… 28
第27図　奥山５号墳小土壙実測図 …… 30
第28図　奥山５号墳出土土師器：直口壷実測図 …… 30
第29図　奥山５号墳出土鉄製品実測図 …… 31
第30図　奥山６号墳調査前地形測量図 …… 32
第31図　奥山６号墳調査成果図 …… 33
第32図　奥山６号墳墳丘土層断面図 …… 34

目　　次

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 3

Ⅲ　調査の経過と概要 …… 4

（1）1号墳 …… 10

（2）2号墳 …… 15

（3）3号墳 …… 19

（4）ＳＸ－01 …… 20

（5）4号墳 …… 24

（6）5号墳 …… 25

（7）6号墳 …… 33

Ⅳ　小　　結 …… 35

例　　言

1．本書は、平成12年度、13年度において財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した奥山古墳群発掘調査報告書である。

2．本書で報告する発掘調査は、松江市都市建設部公園緑地課から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が委託を受けて実施したものである。

3．調査組織は以下のとおりである。

依　頼　者　　松江市都市建設部　公園緑地課

主　体　者　　松江市教育委員会

（12年度）教　育　長	伊　藤　忠　志		（13年度）教　育　長	山　本　弘　正	
副 教 育 長	神　田　義　之		副 教 育 長	友　森　　勉	
生涯学習課長	川　原　良　一		文 化 財 課 長	岡　崎　雄二郎	
文 化 財 室 長	岡　崎　雄二郎		文化財係長(主幹)	吉　岡　弘　行	
文化財係長(主幹)	吉　岡　弘　行		調 査 係 長	飯　塚　康　行	
主 任 主 事	古　藤　博　昭		主 任 主 事	古　藤　博　昭	

実　施　者　　財団法人松江市教育文化振興事業団　埋蔵文化財課

	理　事　長	松　浦　正　敬
	専 務 理 事	米　田　喜　雄
	常 務 理 事	福　井　勝　美
	事 務 局 長	柳　浦　孝　行（12年度）
	事 務 局 長	吉　岡　正　夫（13年度）
調　査　者	調 査 係 長	瀬　古　諒　子
	調査補助員	勝　部　文　生（12年度）
	調査補助員	廣　江　光　洋（13年度）

4．調査の実施にあたっては次の方々の指導と協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。

渡辺貞幸（松江市文化財保護審議会委員考古学担当）、椿真治（島根県教育庁文化財課文化財保護主事）、池淵俊一（島根県教育庁文化財課文化財保護主事）、角田徳幸（島根県教育庁埋蔵文化財センター）、松山智弘（島根県教育庁埋蔵文化財センター）

5．出土鉄製品のＸ線写真撮影については島根県教育庁埋蔵文化財センター文化財保護主事間野大丞氏に依頼し、同氏と同センター調査補助員澤田正明氏により実施していただいた。

6．遺物の復原、実測及び浄書は花田陽子、福田万里が行った。

7．遺物の写真撮影は島根県埋蔵文化財調査センターの撮影場を借用し石川崇、廣江が行った。

8．出土遺物は松江市教育委員会生涯学習部文化財課で保管している。

9．本書の執筆、編集は瀬古と協議の上、廣江が行った。

Ⅰ　調査に至る経緯

平成11年度において松江市公園緑地課（事業者）は、松江市街の南西に位置する松江総合運動公園内にテニス場の建設を計画した。現在、同公園内には８面のテニスコートを有するテニス場が設置されているが、平成16年度に島根県において開催予定の全国高校総体に対応するため、さらに８面のテニスコートの増設が必要となり本計画が持ち上がったものである。

このテニスコートの建設予定地内では「総合運動公園内古墳群」の存在が以前から知られていたが、規模、員数等の詳細が不明であることから、松江市教育委員会で現地調査を行ったところ、古墳推定地として９箇所を確認した。

このうち最も南側に位置する１箇所を除く８箇所が造成計画の範囲に含まれることから、当市教育委員会ではこれらの地点について平成11年11月15日から12月15日にかけて試掘調査を行った。

その結果、これら古墳推定地８箇所のうち３箇所が古墳である可能性が高いと考えられたことから、これらの箇所について全面発掘調査を実施することとなった。

本遺跡の発掘調査は遺跡名を「総合運動公園内古墳群」から「奥山古墳群」と改め、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施したものである。調査期間は平成12年12月４日から平成13年３月31日、平成13年４月９日から同年６月25日である。

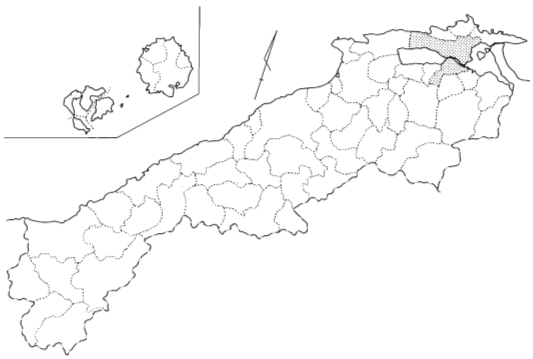
平成13年度において事業者より松江市教育委員会に造成計画変更の協議があった。

その内容としては、当初造成計画外であった古墳の存在する箇所を計画範囲に含め、場内を廻る園路を設けるものであった。しかし、テニスコート本体部分にかかる造成ではないことから、また、遺跡保護の観点から当市教育委員会は事業者に対し古墳の現状保存を要望した。

両者協議の結果、事業者の理解と協力が得られ、園路の設計見直しによって古墳は現状保存されることとなった。

なお、現状保存となった古墳については「奥山７号墳」と呼称し、本報告書中にその所在を標すものである。

（古藤博昭）



第１図　松江市位置図

第２図　奥山古墳群位置図（１：100000）

第３図　奥山古墳群と周辺の遺跡

①奥山古墳群
②長砂古墳群
③乃木二子塚古墳
④向荒神古墳
⑤奥山遺跡
⑥神田遺跡
⑦勝負谷遺跡
⑧渋ヶ谷遺跡
⑨小倉見谷横穴群
⑩袋尻遺跡群
⑪菅沢谷横穴墓群
⑫後友田古墳
⑬友田遺跡
⑭田和山遺跡
⑮田和山１号墳
⑯薬師前遺跡
⑰雲垣遺跡
⑱福富Ⅰ遺跡
⑲福富Ⅱ遺跡
⑳蓮華垣遺跡
㉑屋形古墳群
㉒乃白玉作遺跡
㉓松本修法檀遺跡
㉔欠田遺跡
㉕門田遺跡
㉖神立遺跡
㉗廻田遺跡
㉘松本古墳群
㉙弥陀原横穴墓群
㉚松本横穴墓群
㉛岩屋口古墳群
㉜二名留古墳群
㉝大角山遺跡
㉞布志名大谷Ⅱ遺跡
㉟大角山古墳群
㊱すべりざこ古墳群
㊲才の神遺跡
㊳布志名大谷Ⅰ遺跡

Ⅱ　遺跡の位置と環境

奥山古墳群は、松江市上乃木10丁目４－１番地の松江総合運動公園内に所在する標高30ｍ～35ｍ、南北に延びる低丘陵地に位置する。市街地からは南へ3.0㎞の地点である。丘陵地は南側の尾根基部から北西に標高30ｍの起伏の少ない地形が60ｍ続く。そして尾根は30ｍ程鞍部が続き新たに標高35ｍの低丘陵が北に30ｍ伸びる。更に尾根は北へ80ｍ降るように伸び、北端部の標高は25ｍを測る。周辺は北から東が開け北西に宍道湖を望み松江市南部の市街地を一望できるほどの眺望である。南から西は運動公園の各施設、学校関連の建物が立ち並び背後には中規模な山脈が連なる様相である。

近年この遺跡の周辺地域は、松江市でも屈指の開発地域であり、それに伴う発掘調査で様々な遺跡が分布していることが明らかとなっている。

旧石器・縄文時代　現在この時代に該当する遺跡の発見例はないが、忌部川下流域に所在する廻田遺跡から玉髄のナイフ形石器（旧石器時代）が採取されている。また福富Ⅰ遺跡からは黒曜石製の尖頭器をはじめ黒曜石を中心とした剥片、石器が多数採取されている。今後この時代の遺跡が発見される可能性が考えられる。

弥生時代　この時代の遺跡は忌部川下流域周辺に多く分布している。欠田遺跡（24）は前期～後期までの遺跡で大型石包丁、磨製石斧をはじめ多くの土器片が出土している。田和山遺跡(14)は前期末～中期後半まで営まれた環壕遺跡である。環壕は丘陵を三重に廻らされ、その山頂部では物見櫓と思われる掘立柱建物跡１棟、総柱建物跡１棟、柵列と思われる多数の柱穴が検出されている。遺物は環壕内のつぶて石とともに壺、甕、高坏などの土器類、環状石斧、銅剣型石剣の破片などの石器類、黒曜石、サヌカイト製の石鏃など多種多数出土している。遺跡の性格は未解明な点が多いがこの地が弥生人にとって重要な要所であったことがうかがわれる。友田遺跡（13）は中期から後期の遺跡で土壙墓26基、墳丘墓６基、四隅突出型墳丘墓１基が検出されている。その他、廻田遺跡（27）では後期後半の円形竪穴式住居跡１棟、福富Ⅰ遺跡（18）では後期の竪穴式住居跡５棟、門田遺跡（25）では中期中葉～後期の溝状遺構を検出し、雲垣遺跡（17）では中期後半～後期前半の土器類をはじめ田下駄を中心とした木製品を出土している。今後更にこの時代を解明する貴重な資料が多数発見されるものと思われる。

古墳時代　前期の古墳は袋尻遺跡群（10）の袋尻４号、７号、８号墳がある。このうち４号墳、８号墳は合わせ口の土器棺が出土している。中期の古墳では７基の古墳から構成される大角山古墳群（35）があり中でも１号墳は全長61.4ｍと出雲東部でもトップクラスの前方後円墳である。墳裾より円筒埴輪片を出土している。長砂古墳群（２）は方墳、円墳16基から構成される古墳群で、そのほとんどが墳丘盛土の上層に不整形な長方形土壙を掘り込むことが特徴的である。鉄器類、玉類をはじめ土器では鏃が６個体出土している。遺跡としては玉生産遺跡の大角山遺跡（33）がある。竪穴式住居５棟を検出し、土師器とともに碧玉製勾玉、管玉未製品、瑪瑙製勾玉未製品を出土している。この他、乃白玉作遺跡（22）、福富Ⅱ遺跡（19）など玉生産遺跡は八束郡玉湯町の花仙山を背景に忌部

川、玉湯川流域に多数分布している。後期の古墳は田和山１号墳（15）の横穴式石室を持った全長20ｍの前方後円墳や岩屋口古墳群（31）がある。このころになると横穴墓の造営が多く見られ奥山遺跡（５）、袋尻遺跡（10)、菅沢谷横穴群（11)、弥陀原横穴群（29）などがしられている。いずれも６世紀後半～７世紀初頭の造営で須恵器、鉄器類の副葬品が出土している。遺跡では布志名大谷Ｉ遺跡（38）から製鉄関連の炭窯と言われる横口付炭窯が県内では初めて発見されている。

歴史時代　この時代の遺跡の発見例はあまりなく、松本古墳群（28)、才ノ神遺跡（37）で古代山陰道の「正西道」推定ルートと思われる古代道の遺構が検出されている。

Ⅲ　調査の経過と概要

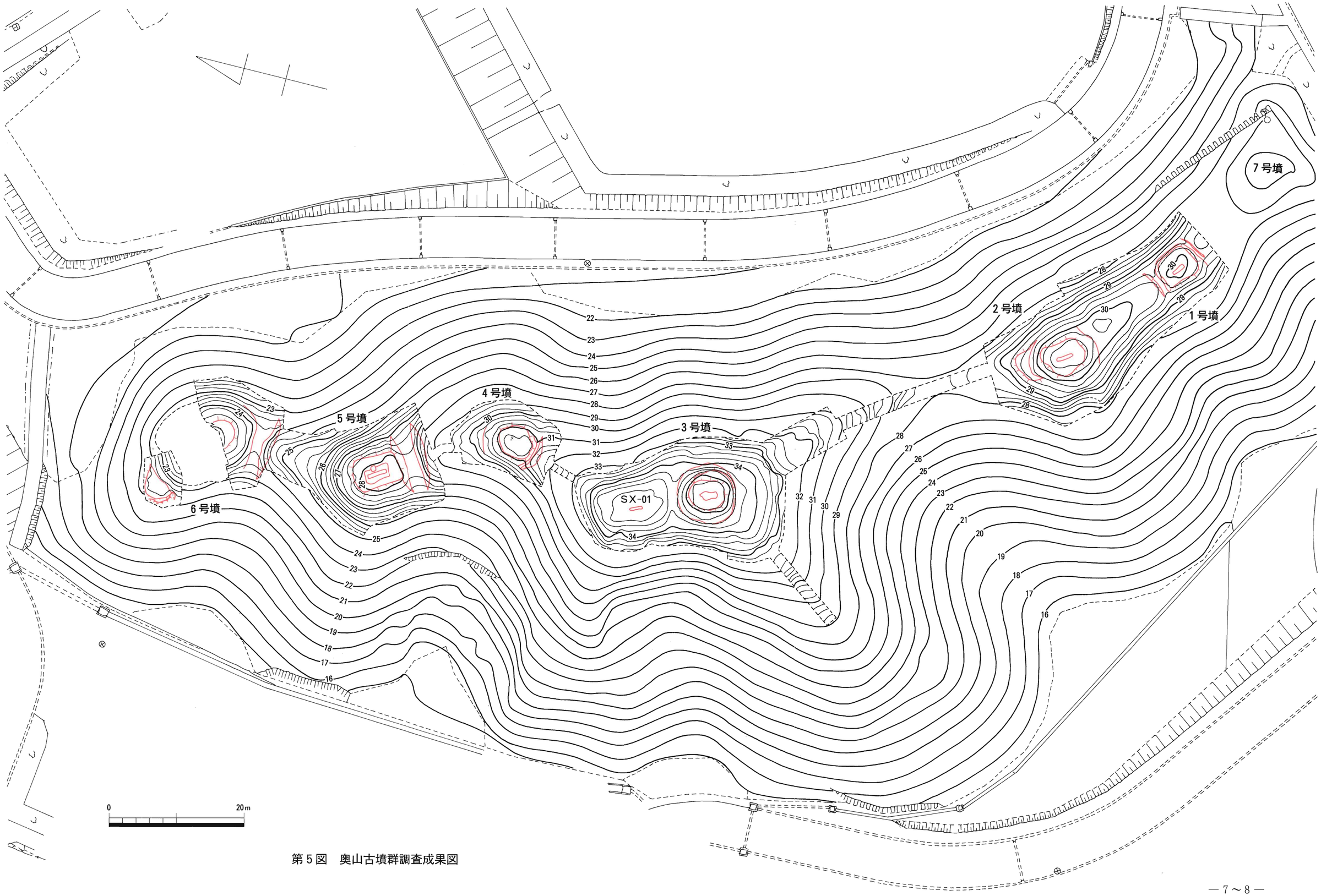
12年度の現地調査は尾根基部の１号墳推定地と標高35ｍの低丘陵地に位地する２箇所の古墳推定地を実施した。調査の結果古墳２基（１号墳・３号墳)、土壙１基（ＳＸ－01）を発見した。ＳＸ－01は当初古墳として調査したが古墳としての根拠が乏しいため古墳ではないものと判断した。３箇所の調査が終了した時点で現地指導会を実施したところ、この３基以外にも尾根の起伏部が古墳である可能性があり確認のため尾根筋にトレンチを入れる必要性が指摘された。そのため平成13年４月よりトレンチ調査を実施した結果、１号墳北側に１基（２号墳）とＳＸ－01の北側の尾根筋に３基（４号墳・５号墳・６号墳）が新たに発見された。４号墳、６号墳は既に主体部が失われている可能性が強い為墳丘の規模を把握する補足的な調査とし２号墳、５号墳を中心に本調査へと移行した。

各古墳の概要は下記の表１に記す。

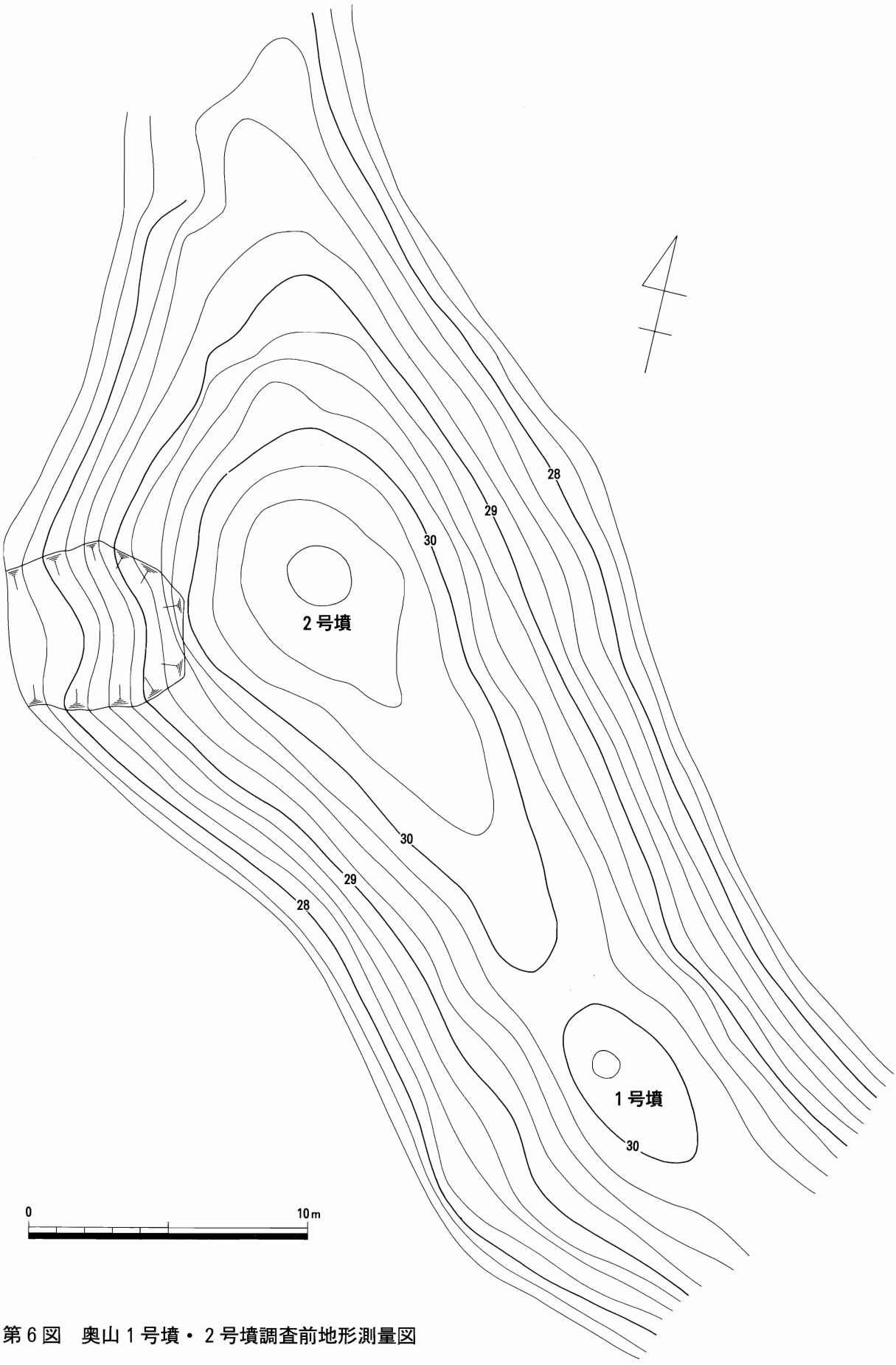
	墳　丘		主　体　部		出　土　遺　物（出土場所）
	墳形	規模（ｍ）	平面形	法量(ｍ)長×幅×深	
１号墳	方墳	6.4×5.6	長 方 形	1.9×0.5×0.1	土師器：坏３個体（墳裾）
２号墳	不明	約10.0（南北）	長 方 形	2.6×0.6×0.25	
３号墳	円墳	8.3	長方形（推定）	2.2×0.85×0.2	鉄剣１口、鉄鏃２本（墓壙内上層）
４号墳	円墳	7.5	流　失		
５号墳	方墳	12.0（南北）	長方形（一段目） 長方形（二段目）	3.6×2.0×0.5 3.0×0.6×0.15	土師器：直口壺１個体（墓壙内中層） 鉄剣１口、刀子１口、鉄鏃１本（墓壙底）
６号墳	不明	約15.0（東西）	削　平		
７号墳	未　調　査				

表１　奥山古墳群概要一覧

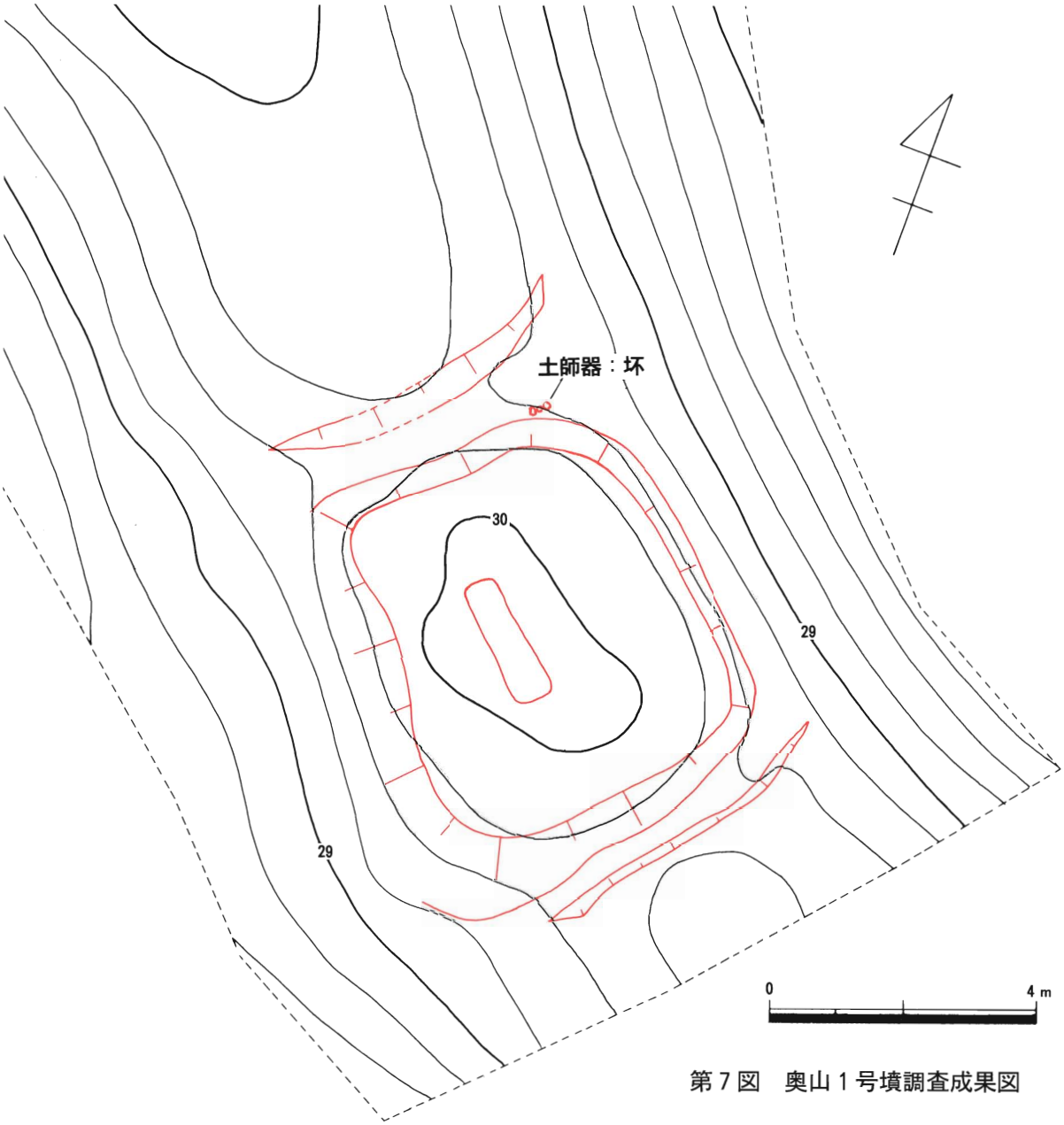
第４図　運動公園造成前調査地付近地形測量図



第 5 図　奥山古墳群調査成果図



第6図　奥山1号墳・2号墳調査前地形測量図



第７図　奥山１号墳調査成果図

（１）１号墳

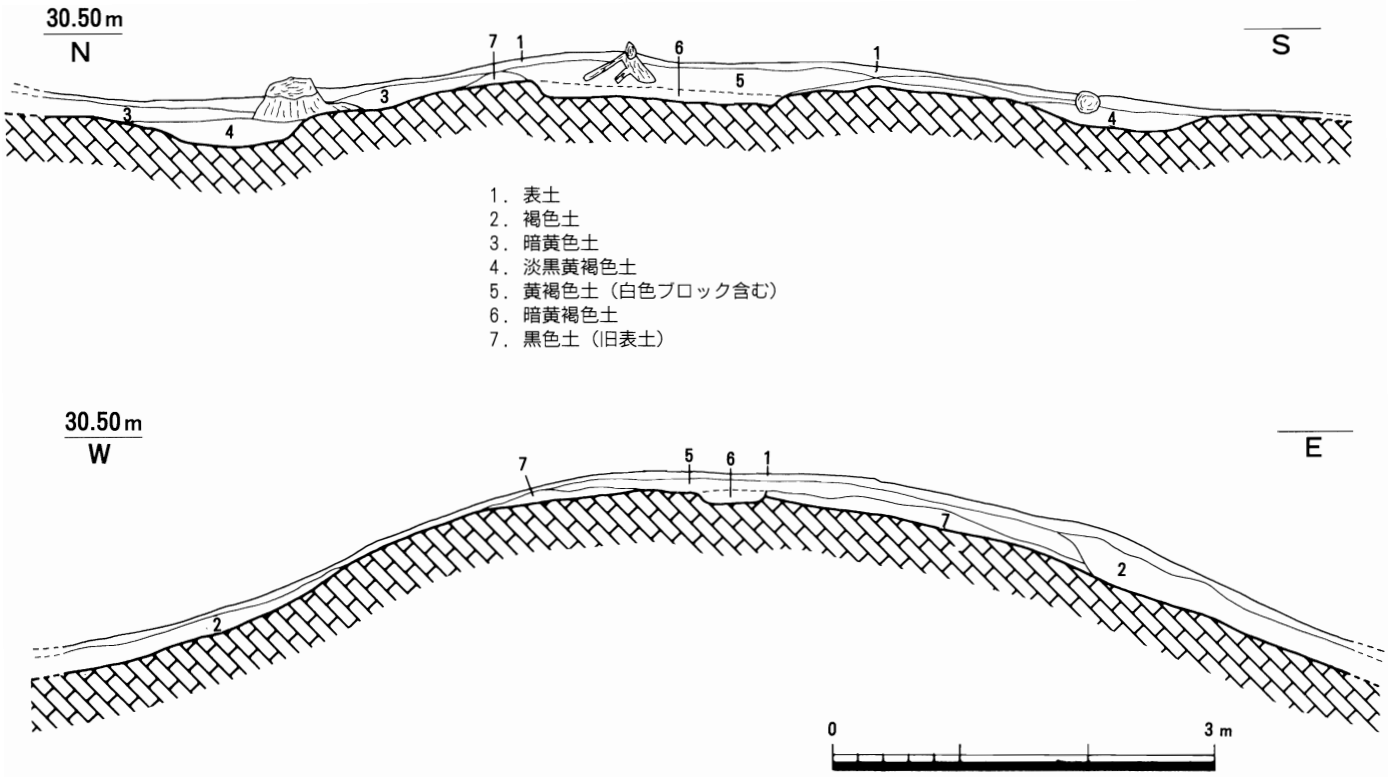
標高30ｍ余りの起伏の少ない尾根上に築かれた小規模な方墳で、調査区外の７号墳と２号墳の中間に位置している。

〔墳丘〕

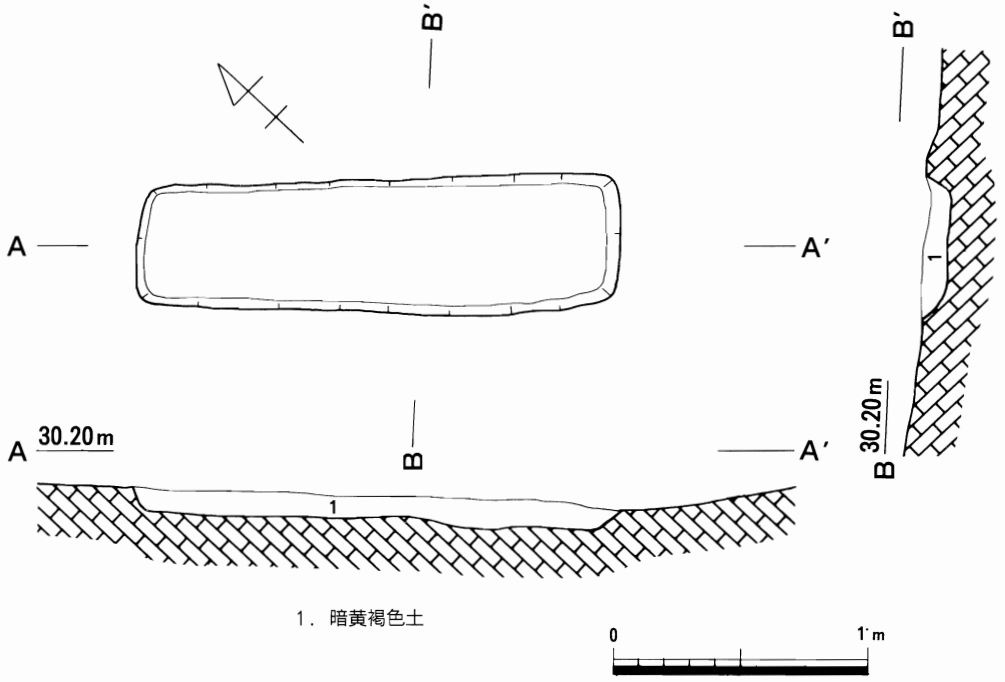
墳丘規模は南北長6.4ｍ、残存高0.5ｍを測る。西辺は流失したものと思われ原形をとどめていないが、主体部を中心に東辺までの距離を反転すれば、東西長は推定5.6ｍとなる。

墳丘の北側と南側に尾根を切断する溝を掘り、墳丘を区画している。北側の溝は上端幅1.4ｍ、下端幅0.8ｍ、深さ0.2ｍを測り、南側の溝は上端幅1.4ｍ、下端幅0.65ｍ、深さ0.15ｍを測る。いずれも浅い断面Ｕ字形を呈する。

南北の溝によって区画された旧表土面の中央部２×３ｍ程の範囲をやや平坦に整えて墳丘基盤とし、



第 8 図　奥山 1 号墳墳丘土層断面図



第 9 図　奥山 1 号墳主体部実測図

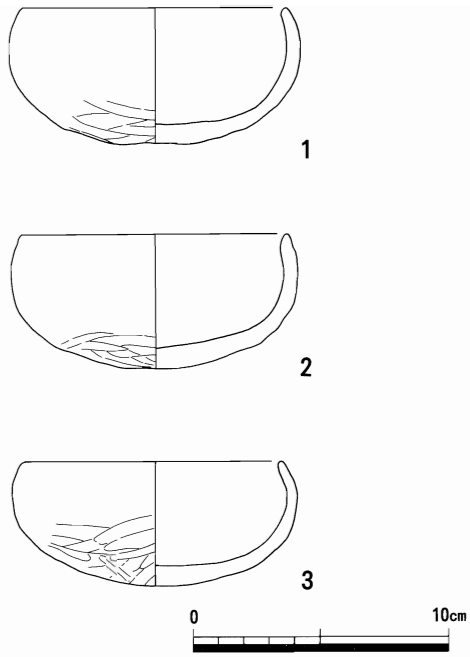
その中心に尾根に平行に主軸をとる墓壙を掘り込み、埋葬した後盛土を施している。盛土はかなり流失したものと見られ、調査時に確認できたのは、厚み約10～20㎝程度であった。

〔主体部〕

上端幅0.48～0.55ｍ、長さ1.9ｍ、深さ0.1ｍの長方形土壙を掘り込み、墓壙とする。主軸はＮ－44°－Ｗである。木棺直葬と思われるが、その痕跡は検出できなかった。墓壙内埋土は暗黄褐色土に地山の白色小ブロックを含み、墓壙上の盛土と同一のものであった。墓壙内から副葬品等の遺物は出土していない。

〔出土遺物〕

北側溝の墳丘寄りで、土師器の坏３個体が、溝底にほぼ接し、並べ置かれた状態で出土した。また南側溝からも土師器片が出土したが、細片の為器種は不明である。



第10図　奥山１号墳出土土師器：坏実測図

第10図１～３は土師器の坏である。いずれも口縁部は内湾し、底～体部は丸みを帯びるもので、１は口径10.4㎝、器高5.4㎝、２は口径10.5㎝、器高5.3㎝、３は口径10.15㎝、器高4.9㎝を測る。底～体部外面は多方向の強いナデ（指による？）調整が行われている。砂粒の動きはなく、へら削りによるものではない。口縁部内外面及び内底面はナデ調整である。胎土中には１㎜以下の砂粒をわずかに含み、色調は橙茶色を呈する。

〔時期〕

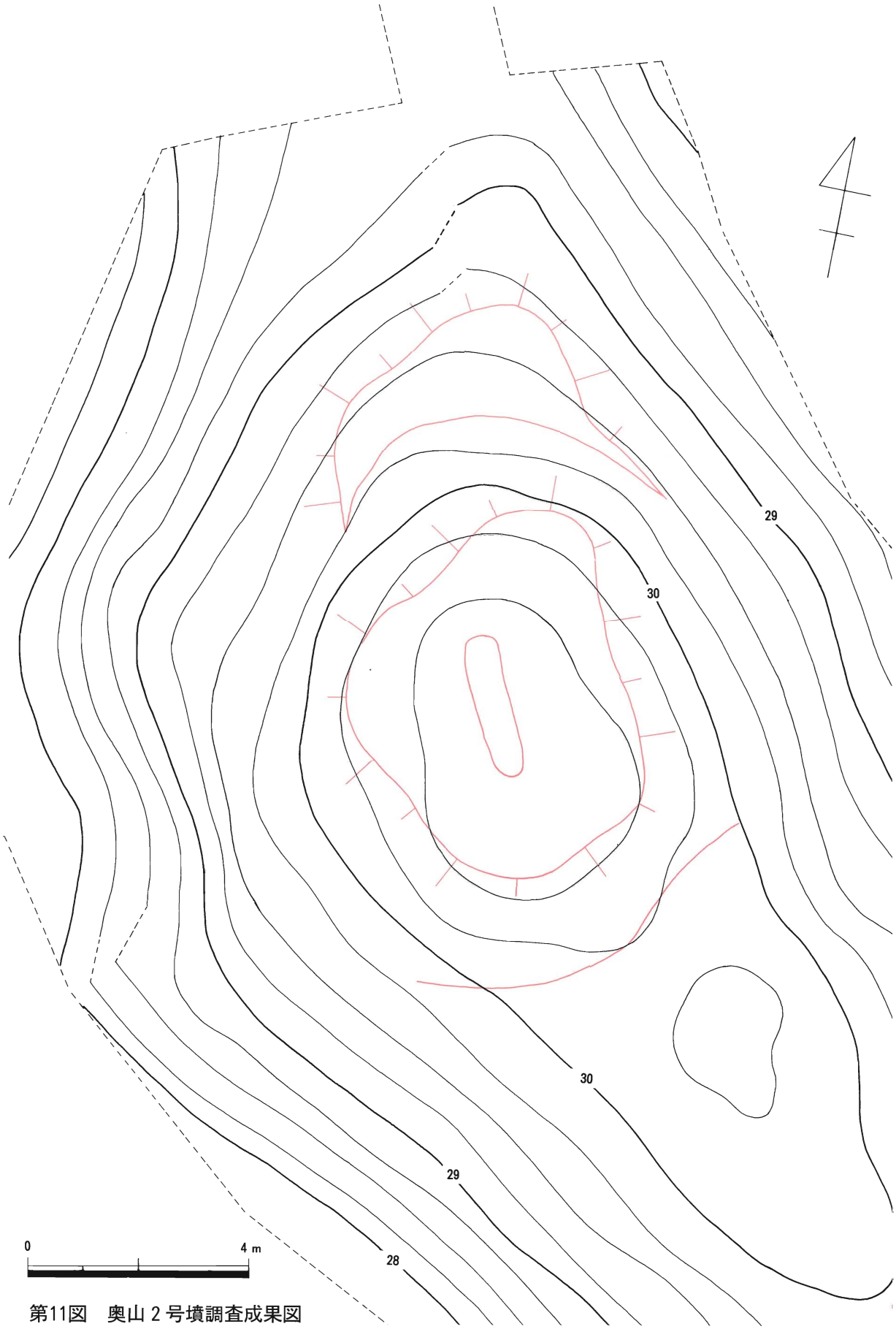
墳裾で出土した土師器の坏は、溝底にほぼ接しており、埋葬時の関連遺物と見られる。墳裾に土師器の坏を並べ置く例は八雲村の増福寺24号墳に見られる。５世紀後半から６世紀前半期の群集墳（増福寺古墳群）中の１基である。方墳と推定される墳丘の大半が失われ、主体部も残存していないが、南周溝から６個体の椀が各々接した状態で発見されている。口径11.2～12.0㎝、器高4.7～5.4㎝を測り、口縁部は内湾する。報告では薬師山古墳と同時期に位置付けられている。奥山１号墳のものと比べると、器高は変わらないが口径は一回り大きいようである。

古墳からの出土例は少ないが、住居跡や包含層からの出土例は松江市堤廻遺跡、大角山遺跡、夫敷遺跡、八雲村前田遺跡、安来市柳Ⅱ遺跡、出雲市三田谷Ⅰ遺跡など数多くある。これらは須恵器出現以前から定型化須恵器併行期まで幅がある。

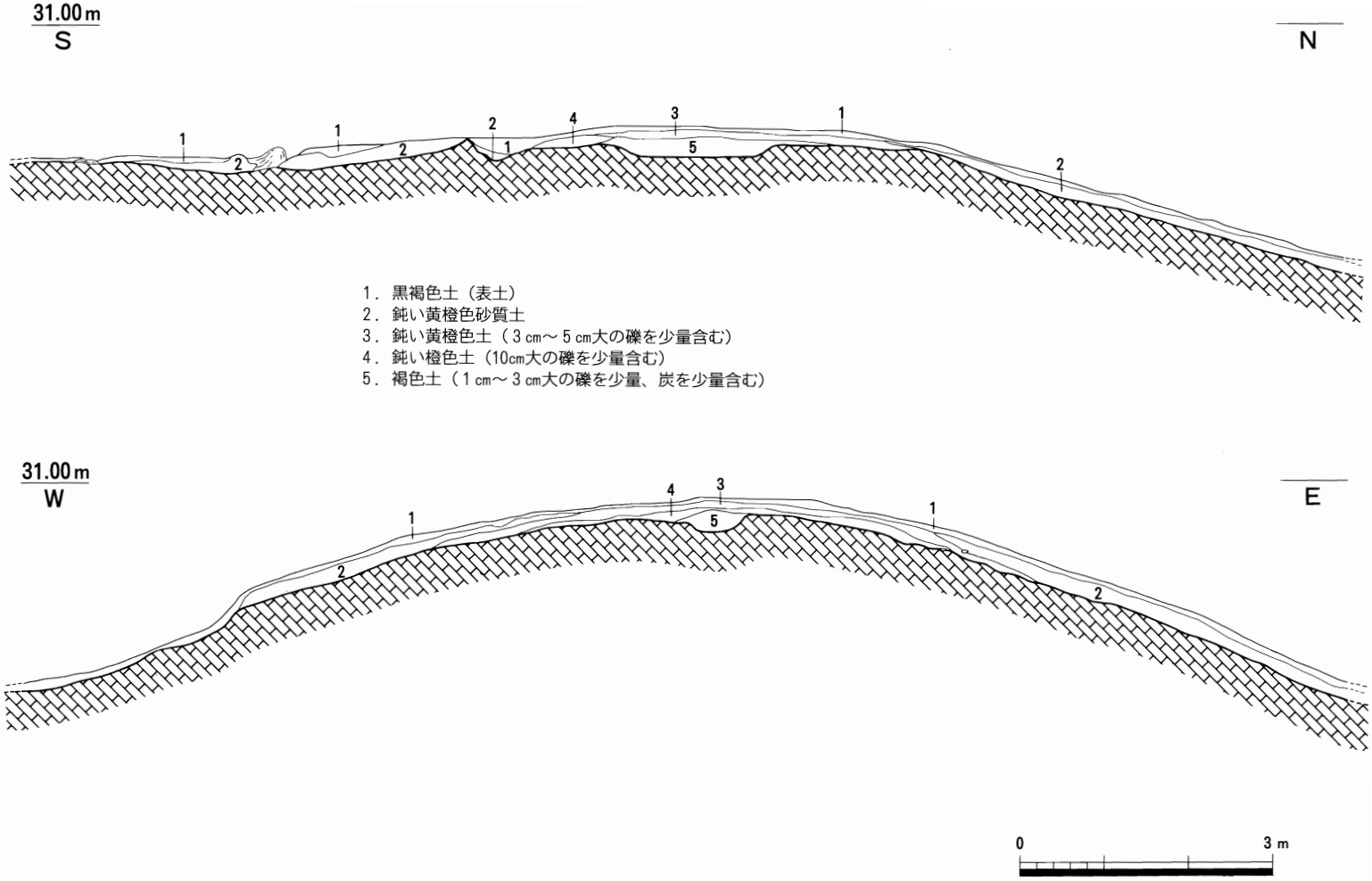
今回の出土品は他遺跡のものに比べて口径が小型化しており、口縁の内湾する特徴が著しいことことから、松山編年Ⅳ期（註１）以降に属するものと考えておく。

従って、本古墳の築造は古墳時代中期後半の新しい時期であろう。

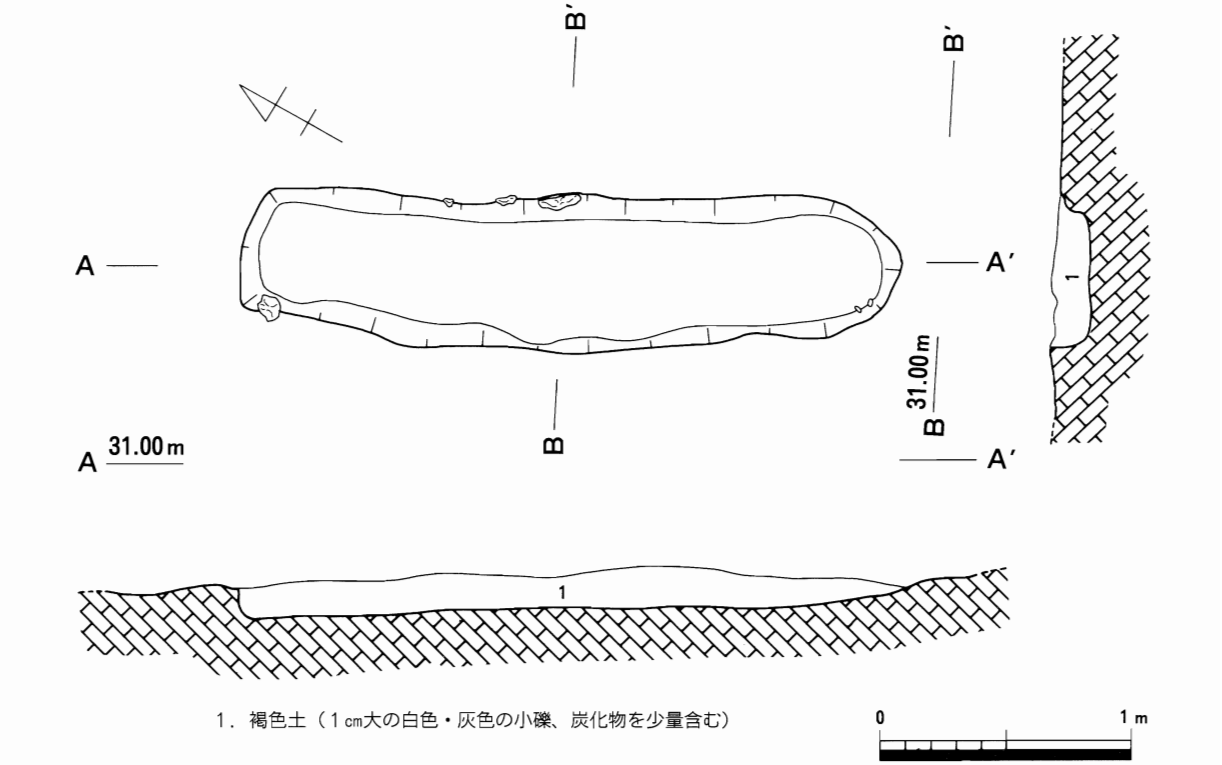
参考文献　　註１　松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌』第８集　島根考古学会 1991年



第11図　奥山２号墳調査成果図



第12図　奥山２号墳墳丘土層断面図



第13図　奥山２号墳主体部実測図

（２）２号墳

１号墳から北に続く標高30ｍ余りの尾根は、約20ｍ地点でわずかな高まりを持ち、その先の標高差約３ｍの鞍部へ落ちていくが、その最高所に築かれたのが本墳である。

〔墳丘〕

墳丘の盛土は一部を残して流失したものと見られ、墳形の判断はつかなかった。

南裾はわずかにそれとわかる程度の起伏をなしており、北裾は降り尾根の地山を削平して幅4.5ｍ、長さ２ｍの三日月状のテラスを作り墳裾としている。南裾から北裾に至る南北の規模は約10ｍ、高さは南裾から0.5ｍ、北裾から１ｍを測る。なお墳丘の東側、西側には明瞭な墳裾は認められなかった。

頂部地山面の４×５ｍ程の範囲をやや平坦に整形して墳丘基盤とし、そこに尾根に平行に主軸をとる墓壙を掘り込み、埋葬後盛土を施して墳丘を築成している。

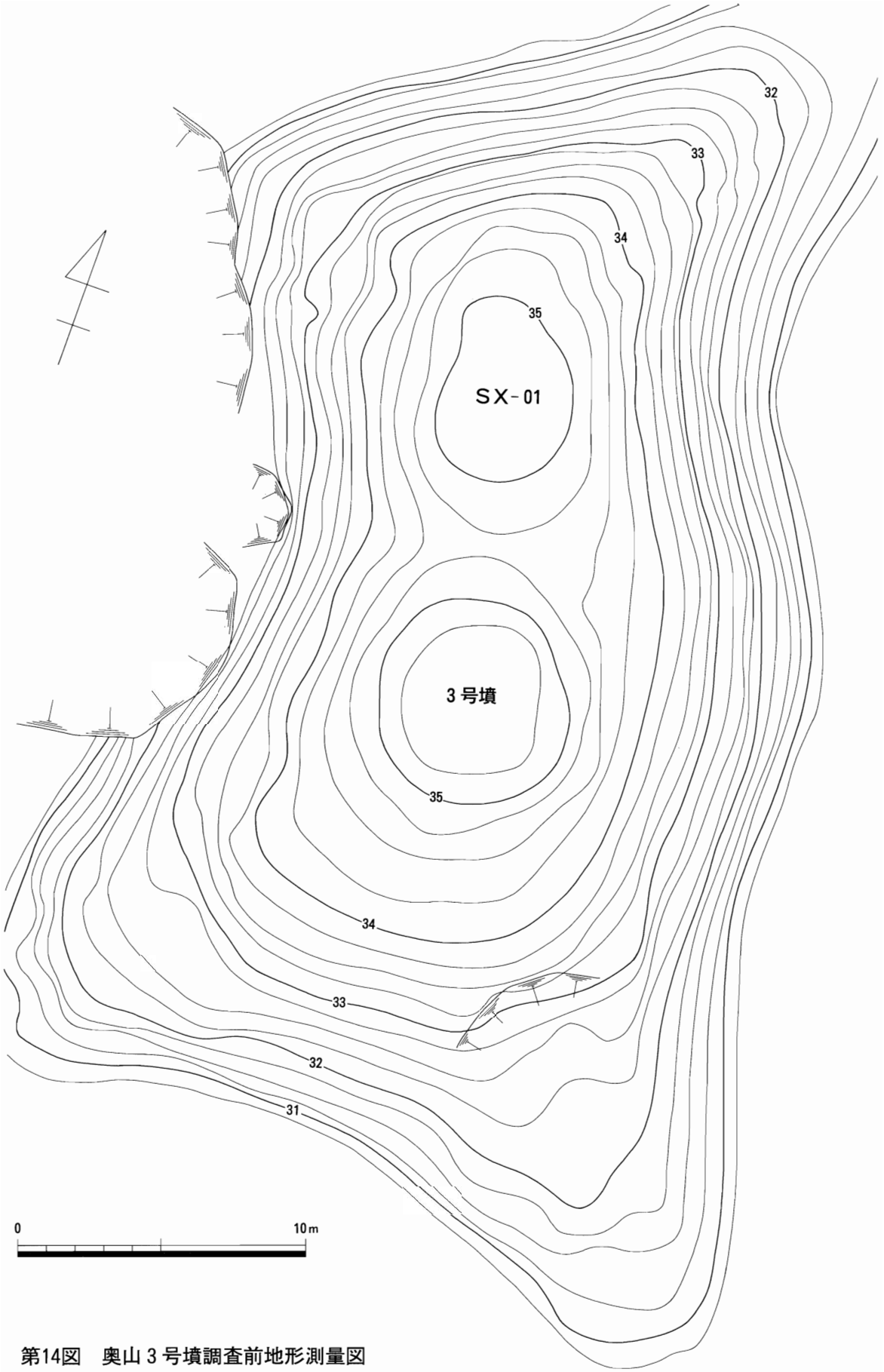
〔主体部〕

幅0.6ｍ、長さ2.6ｍ、深さ0.25ｍの長方形土壙を掘り込み墓壙としている。主軸はＮ－30°－Ｗである。木棺直葬かと思われるが、その痕跡は検出できなかった。

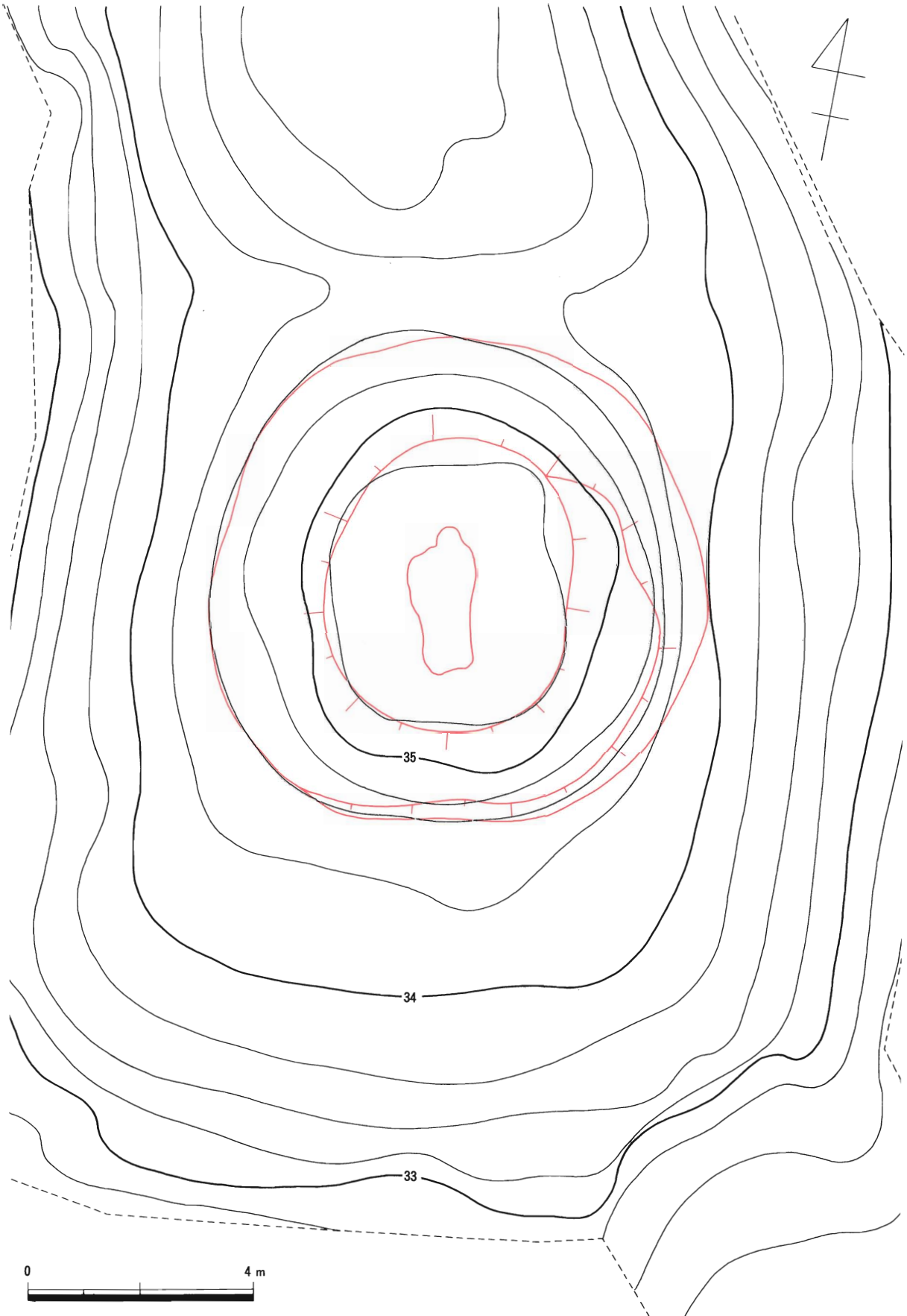
墓壙内から副葬品等の遺物は出土していない。

〔時期〕

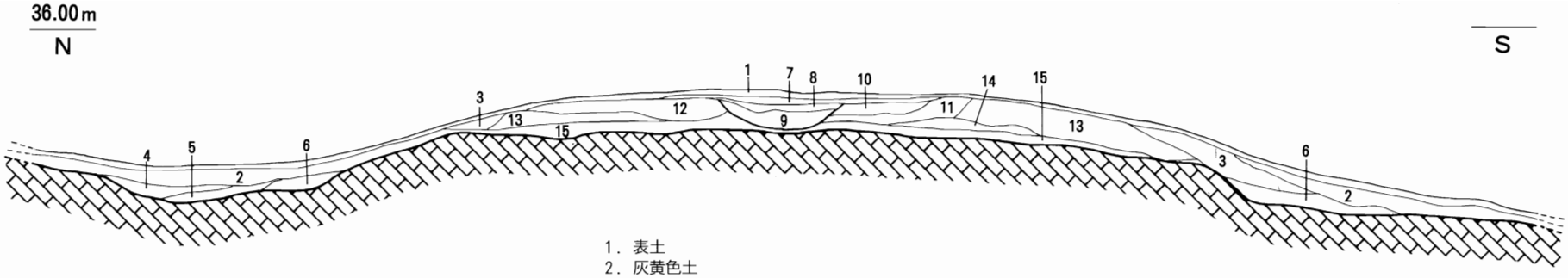
出土遺物が無く、時期を判定できる根拠に乏しいが、１号墳が起伏の少ない尾根の中間地点にわざわざ築かれているのに対し、本墳が目立つ立地にあることを考えると、本墳が先に存在し、１号墳が後から築かれたものと考えるのが自然であろう。



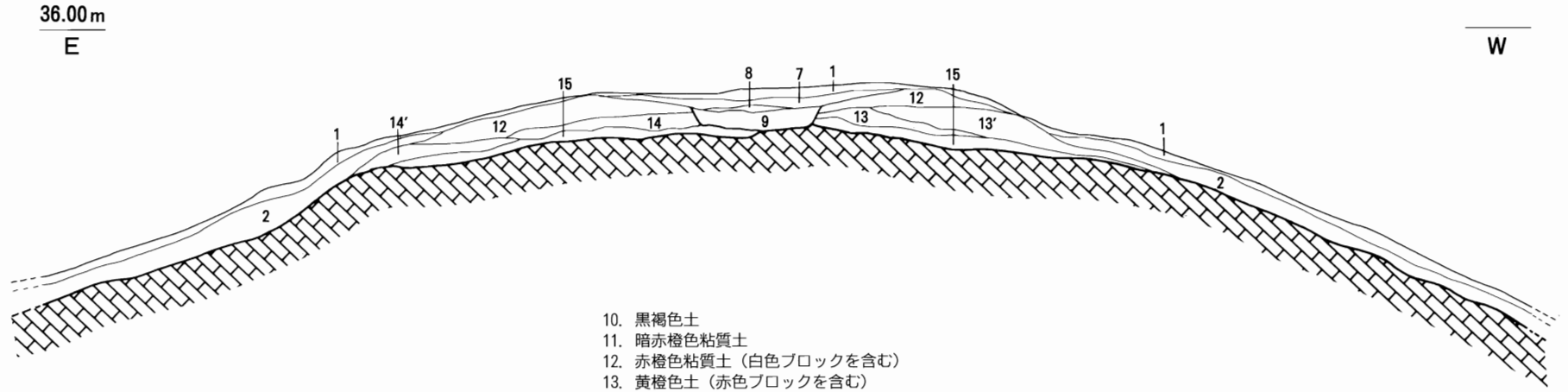
第14図　奥山3号墳調査前地形測量図



第15図　奥山３号墳調査成果図

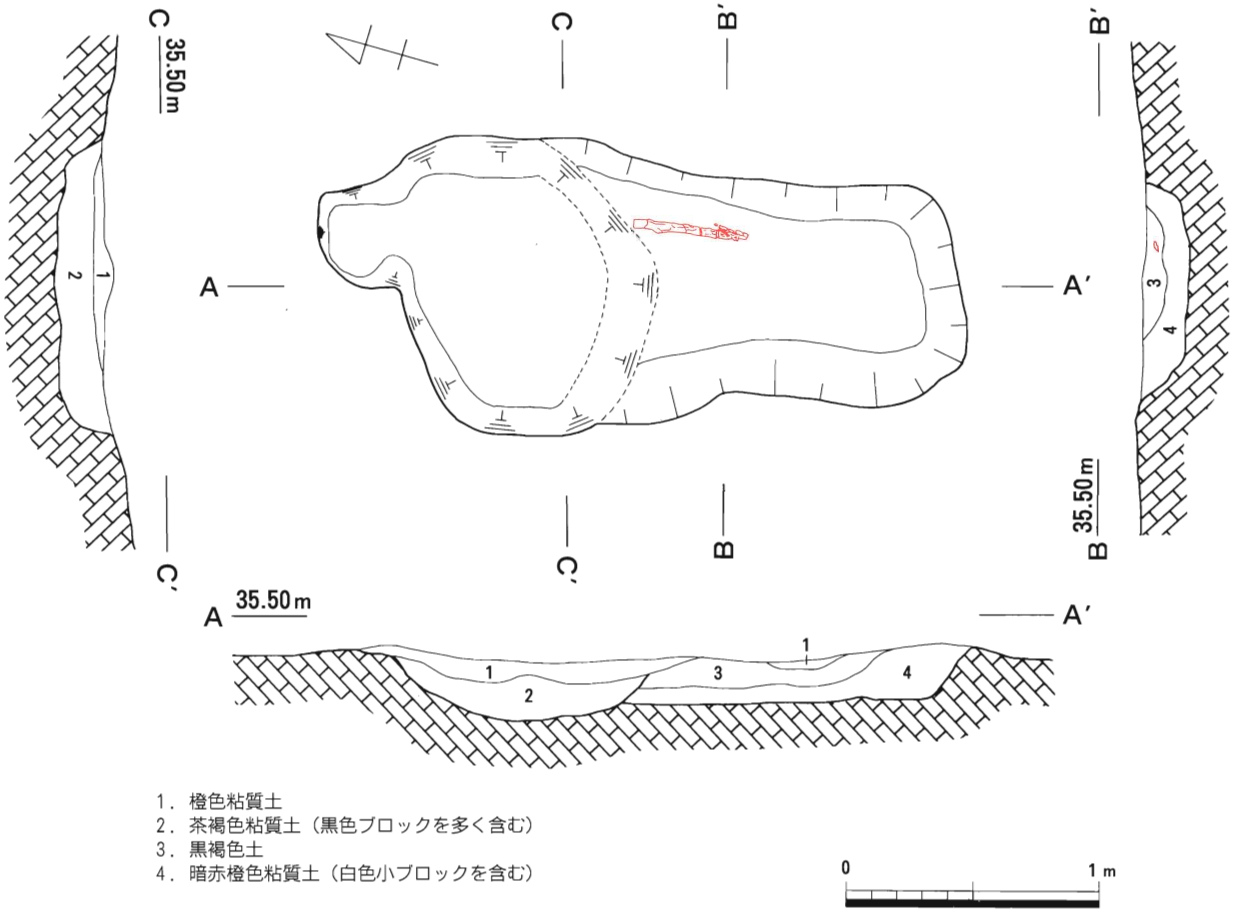


1．表土
2．灰黄色土
3．鈍い橙褐色土
4．黒褐色土
5．暗褐色土
6．黒味がかった橙褐色土
7．橙褐色土
8．橙色粘質土
9．茶褐色粘質土（黒色ブロックを多く含む）



10. 黒褐色土
11. 暗赤橙色粘質土
12. 赤橙色粘質土（白色ブロックを含む）
13. 黄橙色土（赤色ブロックを含む）
13′. 13層よりも橙色が濃い
14. 旧表土と黄橙色土（13層）の混合土
14′. 14層より黄橙色土の割合が多い
15. 旧表土

第16図　奥山３号墳墳丘土層断面図



第17図　奥山３号墳主体部実測図

（３）３号墳

本古墳群中の中央部、最高所に位置し、標高35.50ｍを測る。

〔墳丘〕

調査前測量時には方墳かと思われたが、調査の結果は直径8.3ｍ、高さ0.9ｍの円墳であった。

３号墳が築かれた最高所は、もともと南北に細長い地形であったと思われるが、古墳を築造するにあたって、中ほどを溝で切断し、南側を墓域としたものである。

墳丘は旧表土面を基盤としている。旧表土面の直径約7.5ｍの範囲を残してその周囲は地山の厚みが0.5ｍになるまで削り落とされ、墳裾となっている。残された円形の旧表土上には周辺を削って出た赤橙色～黄橙色系の地山粘質土が0.4ｍ盛り土されていた。墓壙はこの盛土上から掘り込まれており、墓壙底は中心部では旧表土に達するが端部では盛土中で終わっている。この墓壙の中にはおそらく木棺が納められたものと思われ、埋め戻しの後、さらに若干の盛土がなされ、墳丘が完成している。

〔主体部〕

築造当初は幅0.85ｍ、長さ2.2ｍ以下、深さ0.2ｍの長方形土壙の中に木棺が納められていたものと

思われるが、北側半分は撹乱を受けた後、また埋め戻されており、最大幅1.2ｍ、深さ0.25ｍを測る。主軸はＮ－12°－Ｗにとる。

土壙検出面より数㎝掘り下げたところで、鉄剣１口と鉄鏃２本が出土した。幸い撹乱部分にはかかっていなかった。棺側に置かれたものが、棺の腐朽とともに中に落ち込んだ状態と考えられる。棺内の遺物はなかった。

〔出土遺物〕

第18図－１の鉄剣は切先が失われており、残存全長は39.5㎝である。刃部残存長31.5㎝、刃部幅3.0㎝、関部は緩やかなカーブを描いてくりこまれ、茎部長8.0㎝、茎部幅2.2～2.5㎝を測る。茎尻から1.3㎝と3.5㎝のところに直径５㎜の目釘穴があり、前者には目釘が残っている。また関から1.2㎝刃部側に直径４㎜の円孔がある。

２は片刃箭式の長頸式鏃である。茎の先端を僅かに欠損しており、残存長14.6㎝を測る。鏃身部長は3.0㎝、鏃身断面は二等辺三角形の平刃造で、鋭角に入りこむ逆刺をもつ。篦被部は段を持たず、茎部に向かって細くなる。頸部長は11.6㎝である。

３は長頸式鏃の頸部である。鏃身部を欠損しており、両刃式であるか、２と同様の片刃箭式であるかは不明である。篦被部はやはり段を持たず、茎へ先細りするもので、残存長は10.0㎝を測る。

〔時期〕

鏃身部長３㎝前後の片刃箭式の長頸式鏃は古曽志大谷１号墳や山崎古墳に類例がある。いずれも５世紀後半代に位置付けられており、本古墳も同時期のものと考えられる。

参考文献　原　喜久子　「島根県における古墳時代の鉄鏃について」『島根考古学会誌』第10集　島根考古学会 1993年

（４）ＳＸ－01

３号墳の北側に隣接する標高35ｍ余りの小高い場所を古墳想定地として調査したが、墳丘としての加工は認められず、古墳ではないと判断した。

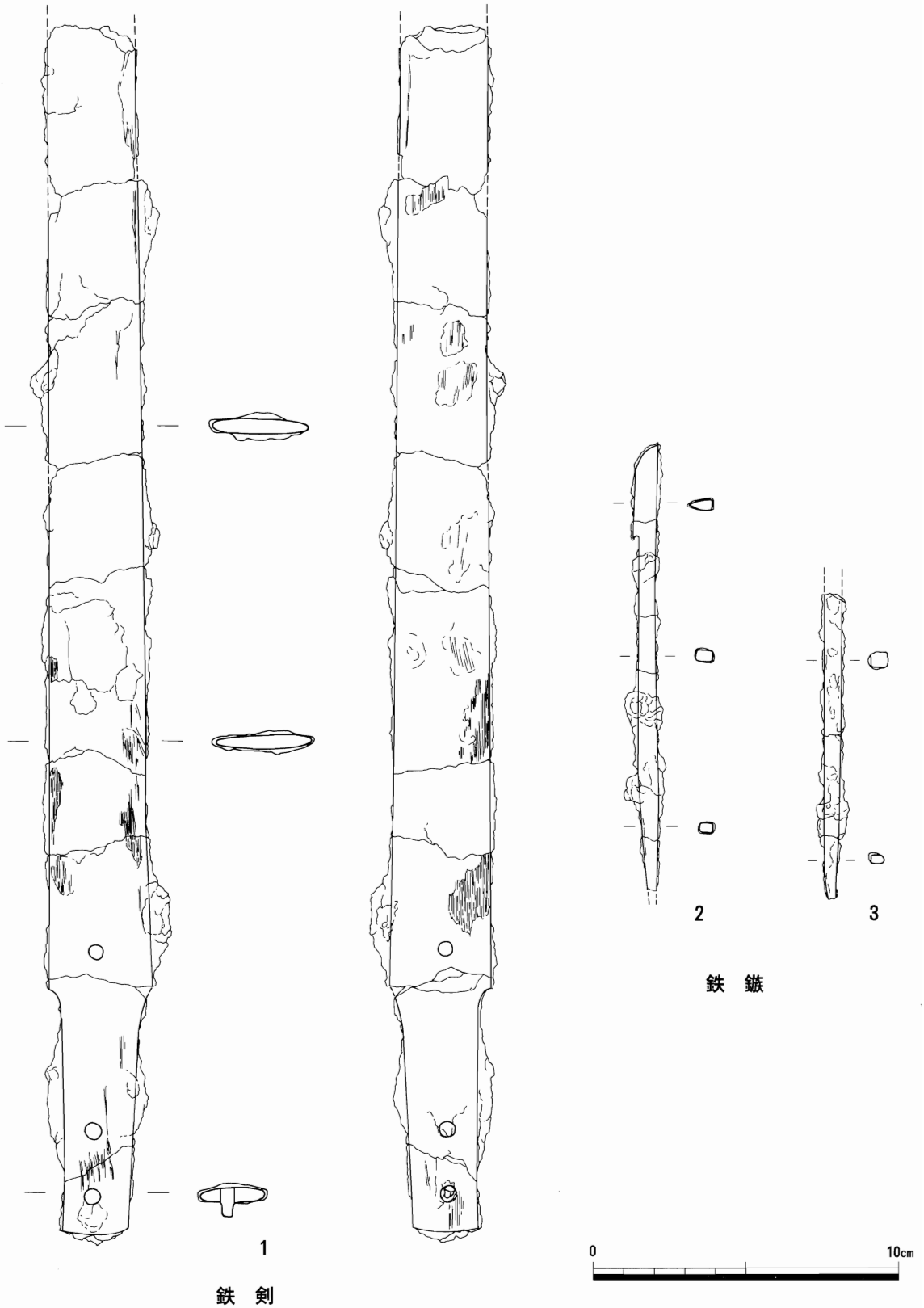
〔形態・規模〕

ＳＸ－01は頂部平坦面の西南寄りで検出した隅丸長方形の土壙である。直上に大きな木の根があったためにかなり掘り下げた時点で土壙の存在が判明し、底部近くがかろうじて検出できたものである。残存幅0.35ｍ、残存長2.15ｍ、深さ0.1ｍを測るが、古墳として調査するために設定した畦にかかって残った部分から推定すると、当初は幅0.7ｍ、深さ0.3ｍはあったものと思われる。表土直下の地山から掘り込まれ、主軸はＮ－11°－Ｗにとる。

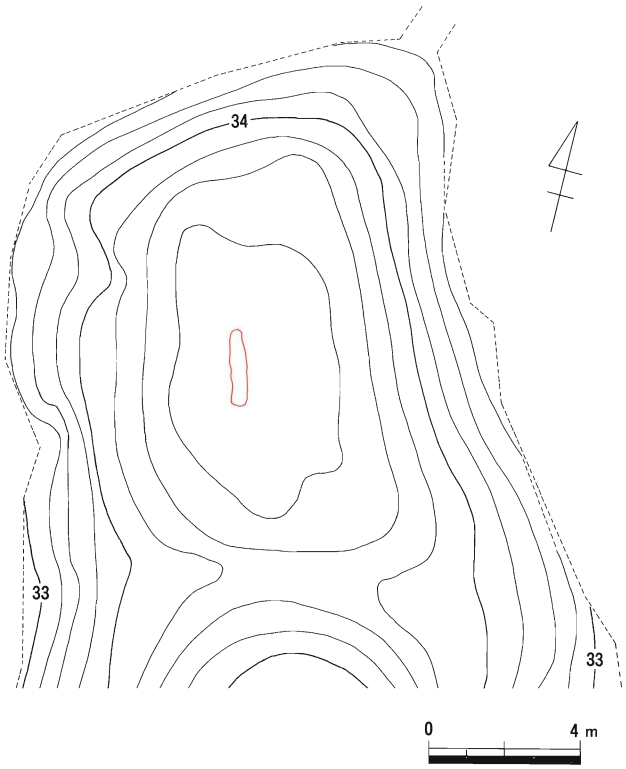
土壙内部、土壙周辺ともに遺物は出土していない。

〔性格・時期〕

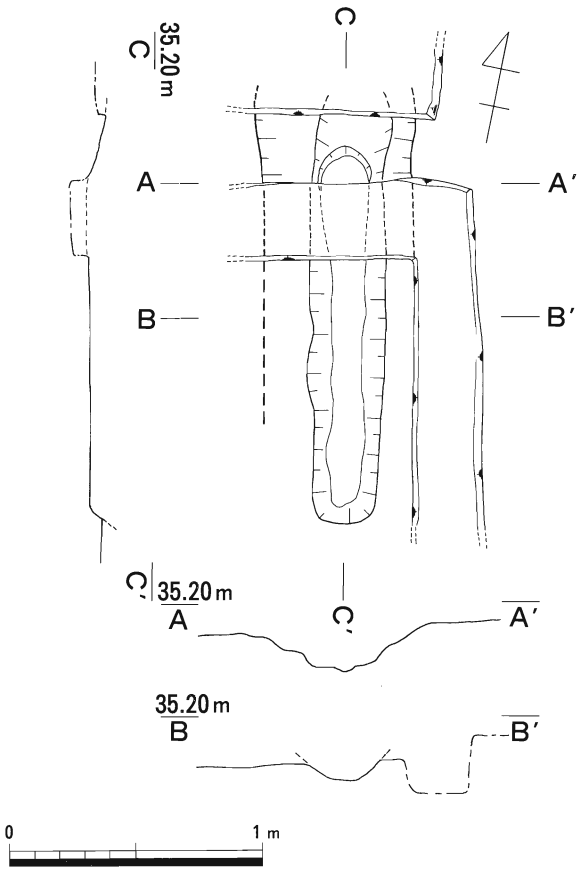
土壙の性格については、古墳群中の３号墳と並ぶ最高所に立地していることから、墓壙の可能性が高いと思われるが、隣接する３号墳との新旧関係ははっきりしなかった。



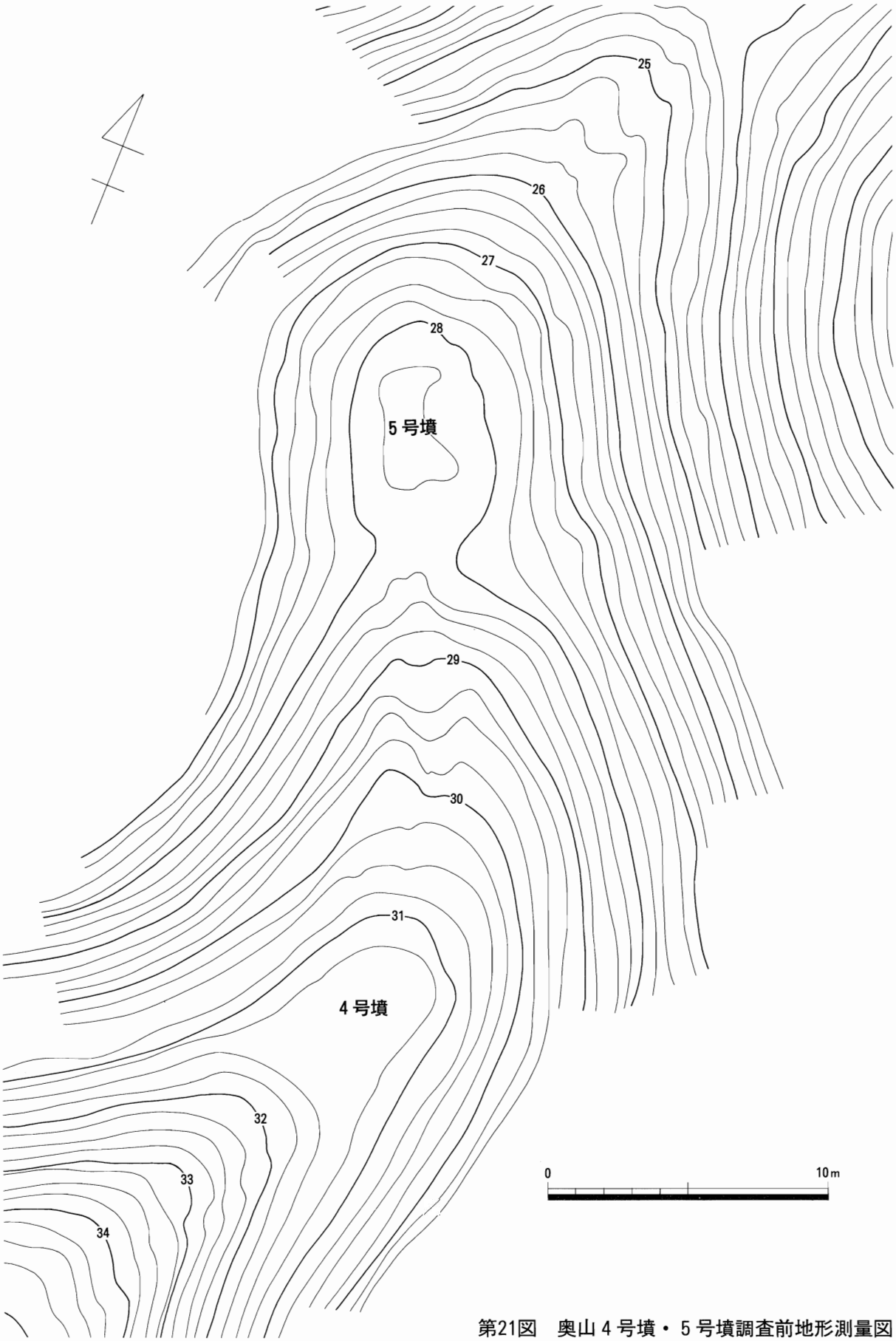
第18図　奥山３号墳出土鉄製品実測図



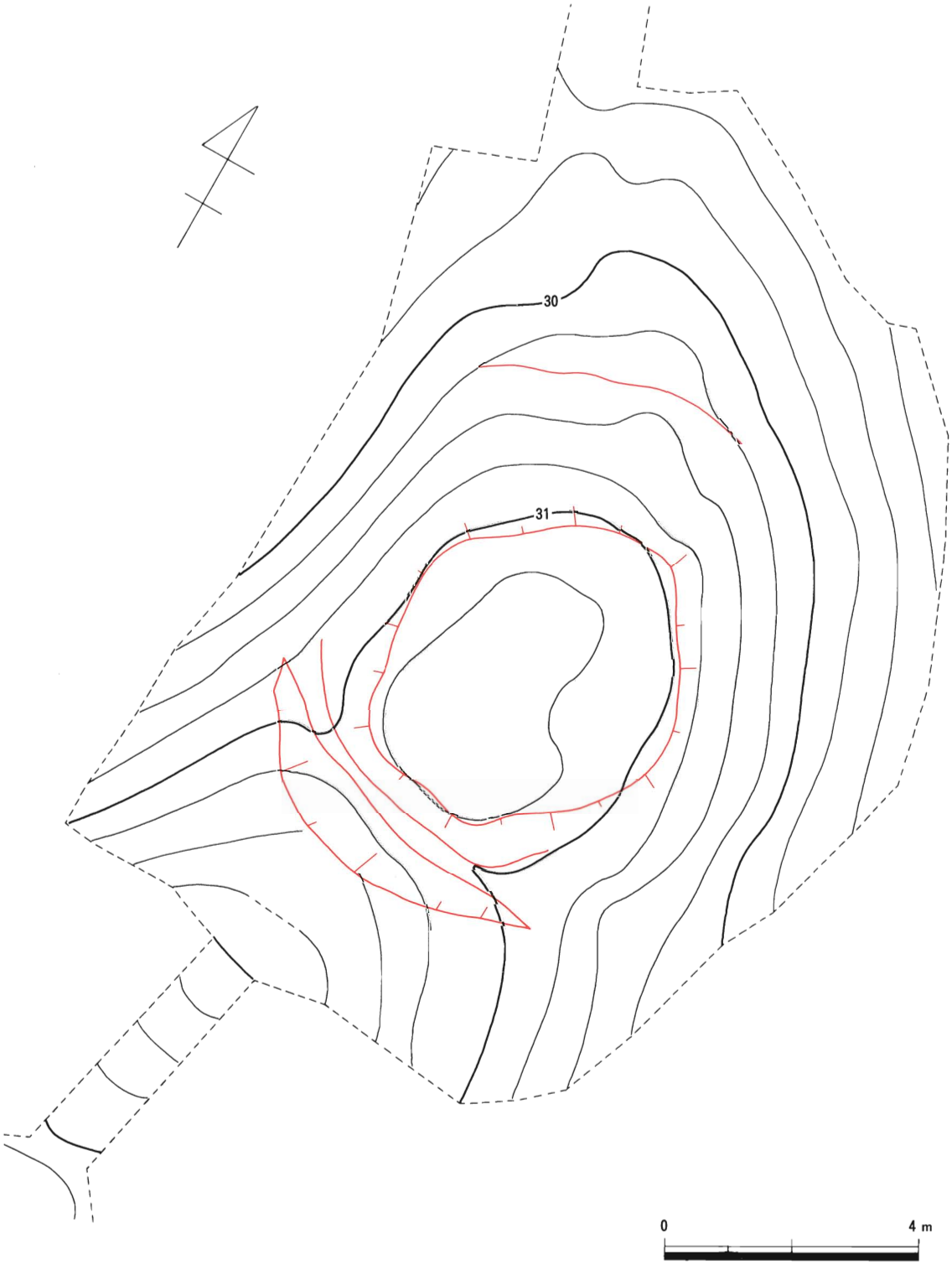
第19図　ＳＸ－01付近調査成果図



第20図　ＳＸ－01実測図



第21図　奥山 4 号墳・ 5 号墳調査前地形測量図



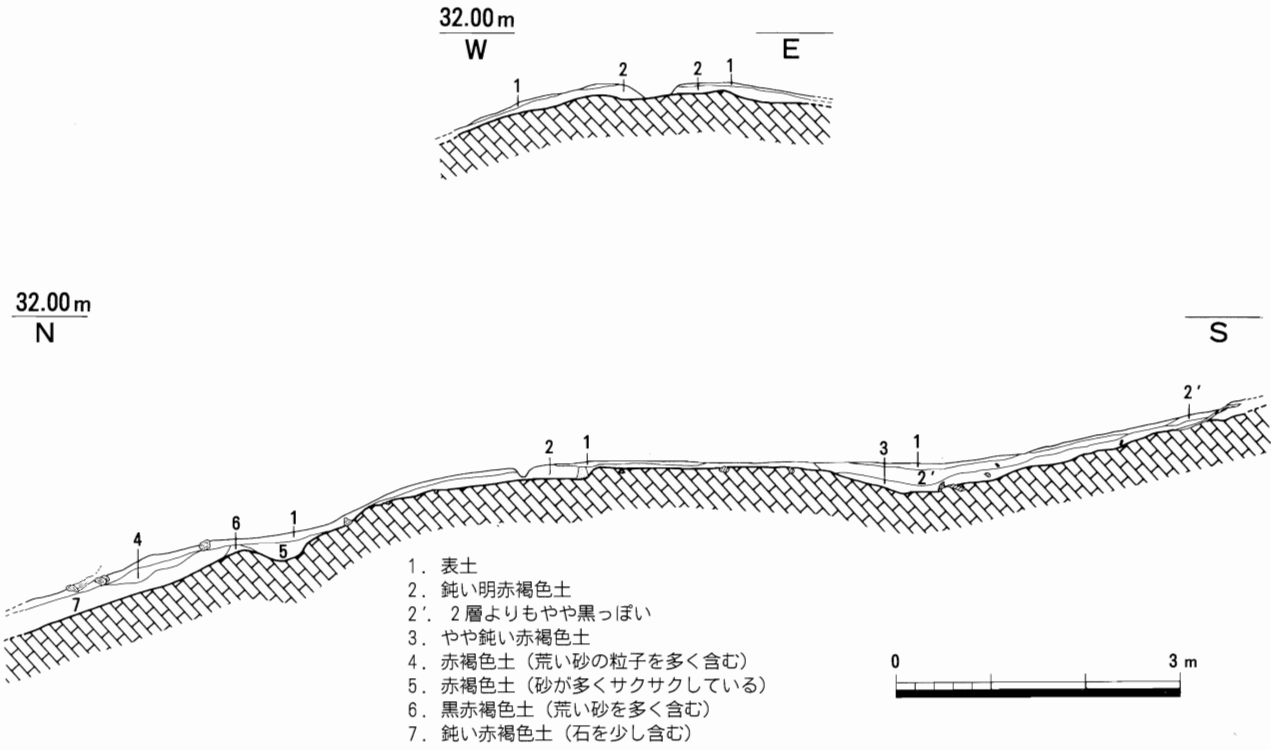
第22図　奥山４号墳調査成果図

（５）４号墳

３号墳の所在する最高所から北に降った標高31.50ｍの地点に位置する直径7.5ｍの小円墳である。

〔概要〕

墳丘を含む周辺は表土除去後10㎝程の鈍い明赤褐色土が堆積し明赤褐色土の地山に達した。堆積土



第23図　奥山４号墳墳丘土層断面図

は地山の風化土と思われ、古墳の盛土は確認できなかった。しかし、墳丘からは主体部が確認できなかったことから、築造当初は盛土を施しその中に主体部を設けていたのではないかと推測される。

墳丘南側に地山を切削加工した溝を検出した。溝は上端幅1.4ｍ～1.7ｍ、下端幅0.45ｍ、深さ0.25ｍ～0.3ｍを測り、断面形は緩やかなU字形を呈す。両端は円弧状に少し回している。墳丘北側では地形の傾斜がやや緩やかになる変換点を墳裾とした。

この古墳からの遺物は皆無であり、時期を特定できる根拠は得られなかった。

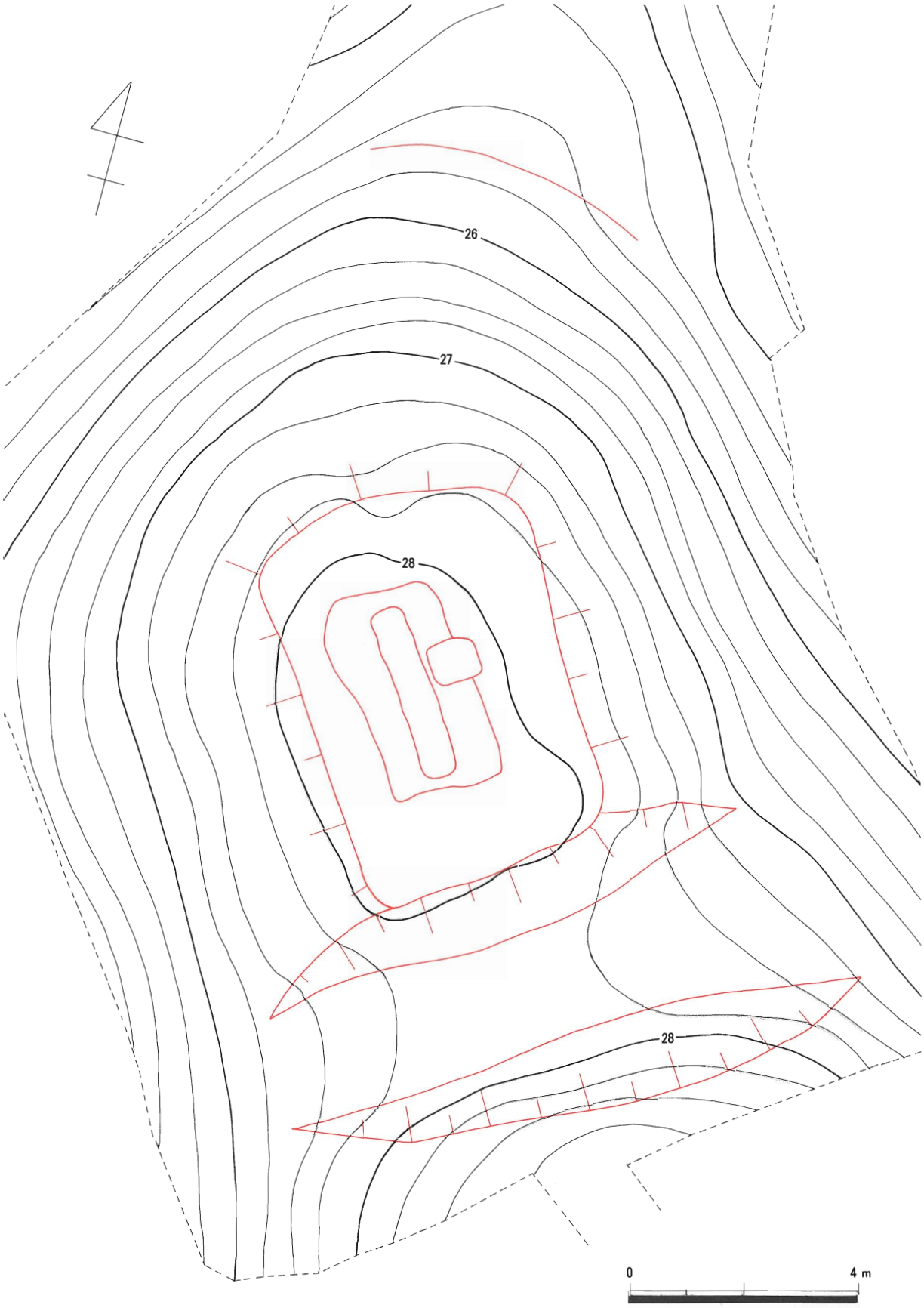
（６）５号墳

４号墳より北北西へ降った尾根筋に位置し標高28ｍを測る。

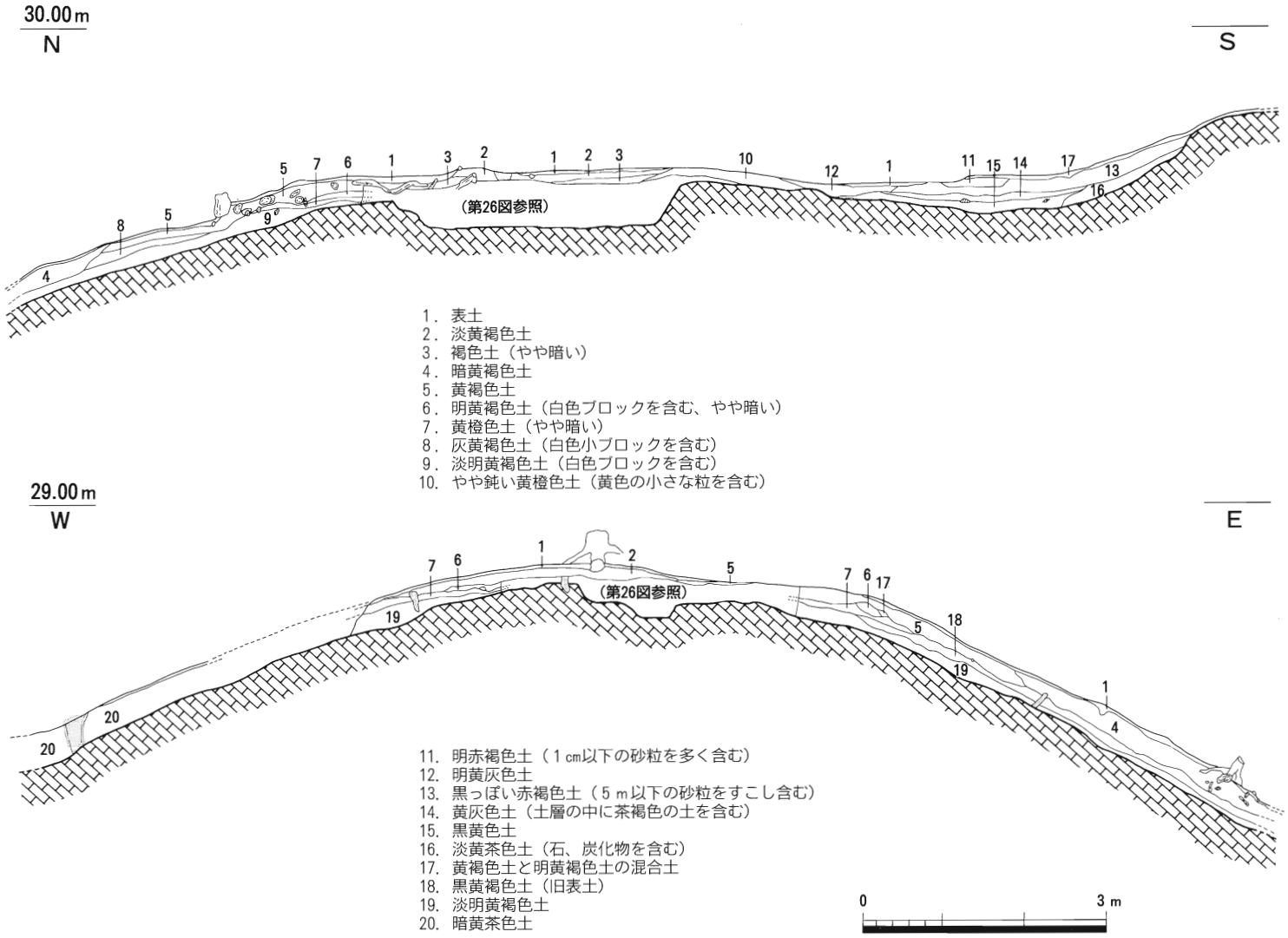
〔墳丘〕

墳頂部は盛土の残存状況が悪く明瞭な規模を測れなかったが、南側の地形ラインが直線状で北側に向かい直角ぎみに回るため南北7.0ｍ、東西4.5ｍの長方形を呈していたと思われる。南側に比べると北側のレベルが低いため、北側では原形を留めないほど著しく盛土が流失したものと思われる。

墳丘南側は尾根を切断し溝を設け墳丘をきわだたせている。溝の規模は上端幅4.5ｍ、下端幅2.8ｍ、墳頂からの比高0.4ｍを測り、断面形を緩やかなU字形を呈す。東側、西側の墳裾は意図的に整形したと思われる地形を確認できなかった。北側についても同様に明瞭な墳裾は検出できなかったので、斜面の傾斜が若干緩やかになる地形の変換点を墳裾とした。墳頂からの比高は2.0ｍを測り、南北の

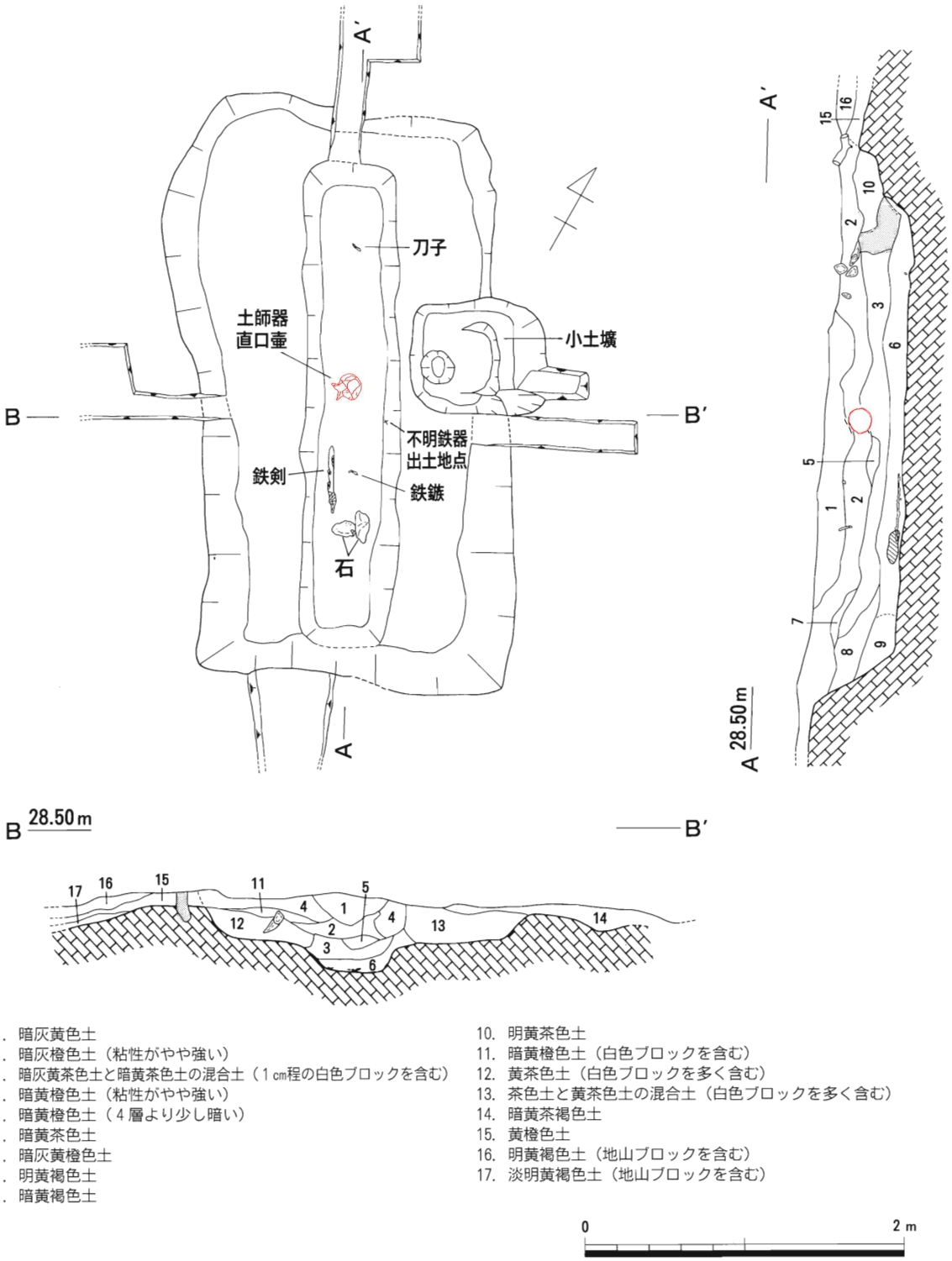


第24図　奥山５号墳調査成果図



1．表土
2．淡黄褐色土
3．褐色土（やや暗い）
4．暗黄褐色土
5．黄褐色土
6．明黄褐色土（白色ブロックを含む、やや暗い）
7．黄橙色土（やや暗い）
8．灰黄褐色土（白色小ブロックを含む）
9．淡明黄褐色土（白色ブロックを含む）
10．やや鈍い黄橙色土（黄色の小さな粒を含む）
11．明赤褐色土（１㎝以下の砂粒を多く含む）
12．明黄灰色土
13．黒っぽい赤褐色土（５㎜以下の砂粒をすこし含む）
14．黄灰色土（土層の中に茶褐色の土を含む）
15．黒黄色土
16．淡黄茶色土（石、炭化物を含む）
17．黄褐色土と明黄褐色土の混合土
18．黒黄褐色土（旧表土）
19．淡明黄褐色土
20．暗黄茶色土

第25図　奥山５号墳墳丘土層断面図



第26図　奥山5号墳主体部実測図

規模は約12.0ｍを測ることとなる。墳丘は築造当初より高低差のある北、東、西側にはあまり手を加えずに自然地形を充分に活用し、墳頂部のみを整形し築造されたものと推測される。

築造手順は、まず墳頂部の旧表土を削り地山面をある程度整地し墳丘基盤としている。次に墳頂部に粘性の黄橙色土を盛土して平坦面を整形し墓壙を掘り込んでいる。盛土はレベルの低い北側に厚く

盛られ南側に行くほど薄く盛られている。特に北側の西角で20㎝～25㎝と最も厚く盛られ、北側の東角で８㎝～15㎝、東側、西側で３㎝～12㎝を測る。南側において盛土はほとんどなく、墓壙の掘り込みも地山面からであった。埋葬後はこの黄橙色土に類似する盛土を施し、さらに黄褐色土を盛土したと思われる。

〔主体部〕

墳頂部平坦面の中央に主軸をＮ－27°－Ｗにとる二段掘りの墓壙を検出した。規模は長さ3.6ｍ、上端幅1.8ｍ～2.1ｍ、深さ0.5ｍを測る。木棺を安置する為の内側の掘り込みは、墓壙中央に主軸を同位にして掘り込まれている。規模は長さ3.0ｍ、上端幅0.58ｍ～0.6ｍ、深さ0.15ｍを測る。南側の小口辺には段を有していなかった。

墓壙底部は平坦に整形されておりレベルの差異はほとんどなく、下端幅も0.36ｍ～0.42ｍとほぼ均一に掘り込まれている。この状況から頭位を考察することは困難であったが、底部南側より枕石と思われるL字状に組み合わされた15㎝～20㎝程の石を２個検出したため、頭位は南東に置かれていたものと推測される。底部からの出土遺物は鉄剣１口、鉄鏃１本、刀子１口、不明鉄器１個であった。鉄剣、鉄鏃、刀子は底部より２㎝～３㎝程浮いた状態で出土しており、遺体の上に置かれたものと考えられる。また刀子は切先を下に斜めに落ち込んでおり棺上に置かれていた可能性も考えられる。不明鉄器は墓壙中央の東側側壁に位置し底部からは７㎝程浮いた状態であった。

埋土からは土師器直口壺が１個体出土し、埋葬後盛土を施す前に置かれた供献土器と思われる。

〔出土遺物〕

28図―１の直口壷の体部は比較的良好な残存状況であるが、口縁部は１／３程度で端部を欠損している。器高は17.3㎝（推定）、口径10.6㎝（推定）、頸部径9.4㎝、胴部最大系15.9㎝を測る。頸部は緩やかに「く」の字に屈曲し、口縁部はやや外傾してまっすぐ伸びる。胴部は肩が張らず胴部最大径に達し、底部にかけて丸みを帯びるやや偏平な型を呈している。外面の調整は頸部から口縁部にかけて若干ナデ調整が見られるが、全体的に風化が著しいため不明である。内面の調整は頸部から口縁部にナデ調整、胴部上方に横方向のヘラ削り、胴部下方にヘラ削り後ナデ調整が施されている。底部には深い指頭圧痕が残っている。胎土中には１㎜～２㎜程の砂粒を少し含み、色調は橙色から黄橙色を呈している。

29図―１の鉄剣は全長42.4㎝、剣身長31.8㎝、最大刃幅0.5㎝、茎長10.6㎝、茎幅1.5㎝～2.4㎝を測る。茎尻より1.6㎝と6.3㎝のところに径６㎜の目釘穴が穿たれている。関は浅く直角に切れ込み茎は茎尻に向かってまっすぐ細くなり茎尻を丸く整えている。茎上部より剣身中ほどにかけては若干の木質が観察され、副葬時には鞘に納めてあったものと思われる。

29図―２の鉄鏃は錆化が著しく明瞭な形状を知ることは困難であったが、鑿箭式の長頸式鏃ではないかと思われる。残存長5.2㎝、鏃身長2.1㎝（推定）を測り、明瞭な関は持たずに箆被部へと続く。茎は欠損しているため不明である。

29図―３の刀子は残存長7.6㎝、刀身長5.0㎝、元幅1.2㎝を測り、ほぼ完型で出土した。関から茎にかけては柄と思われる木質が観察される。そのため形状は確認できなかった。

また棺底から出土した不明鉄器（図版21）は、錆化が著しく細微であった。径２㎜程の針金状のものと思われ、先端部を折り返し長さ８㎜程の細長い輪を作っているようである。

〔時期〕

墓壙内で出土した土師器の直口壺は、類例を安来市の渋山池１号墳にみることができる。胴部がやや扁平し、口縁はまっすぐに開く形態で松山編年Ⅳ期（註１）に位置づけられている。また、棺底より出土した鉄剣は、剣身長から短剣に属するものである。池淵俊一氏の論考（註２）によると、茎、関の形態は中細茎、浅直・斜角関タイプであり若干古墳時代中期後半にも見られると考えられている。これらのことより本古墳の築造は古墳時代中期後半と考えられる。

〔小土壙〕

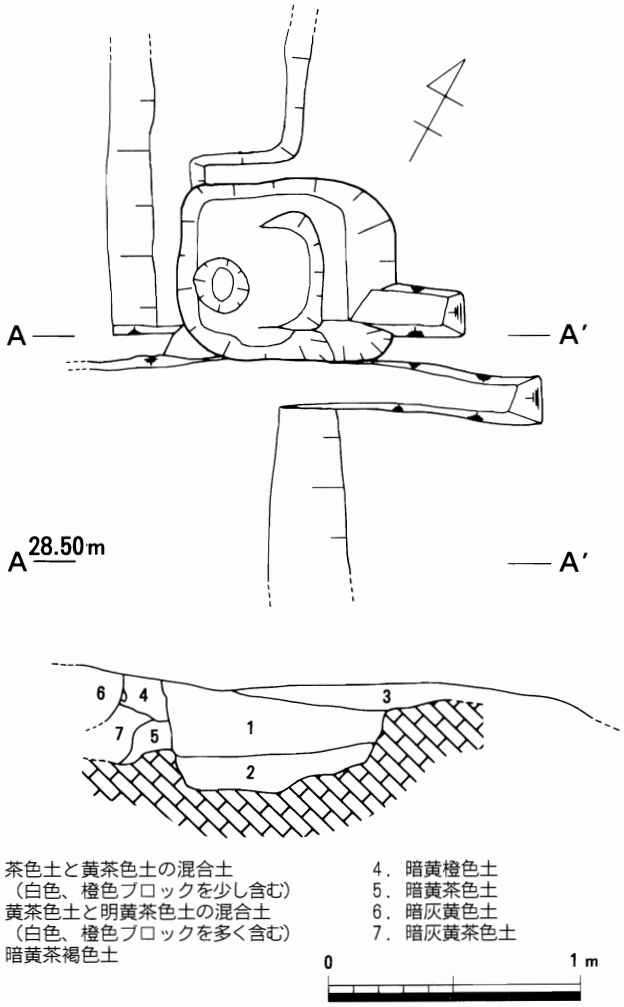
この土壙は墓壙中央東側において検出された。規模は南北0.7ｍ、東西0.85ｍ、深さ0.4ｍを測り、平面形は方形を呈す。土壙は墓壙の盛土上より掘り込まれており、底部は不整形で段を有するところもある。後世に掘り込まれたものと思われるが、遺物が出土していないため時期や性格は不明である。

参考文献

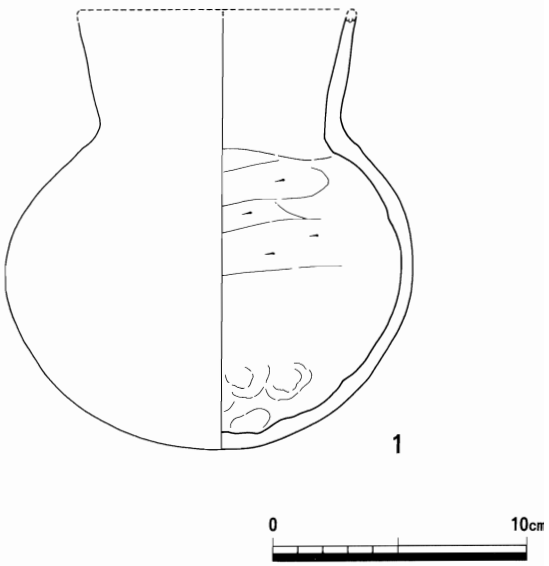
註１　松山智弘　「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」
『島根考古学会誌』第８集
島根考古学会　1991年

註２　池淵俊一　「鉄製武器に関する一考察－古墳時代前半期の刀剣類を中心として－」
『古代文化研究　第１号』
島根県古代文化センター　1993年

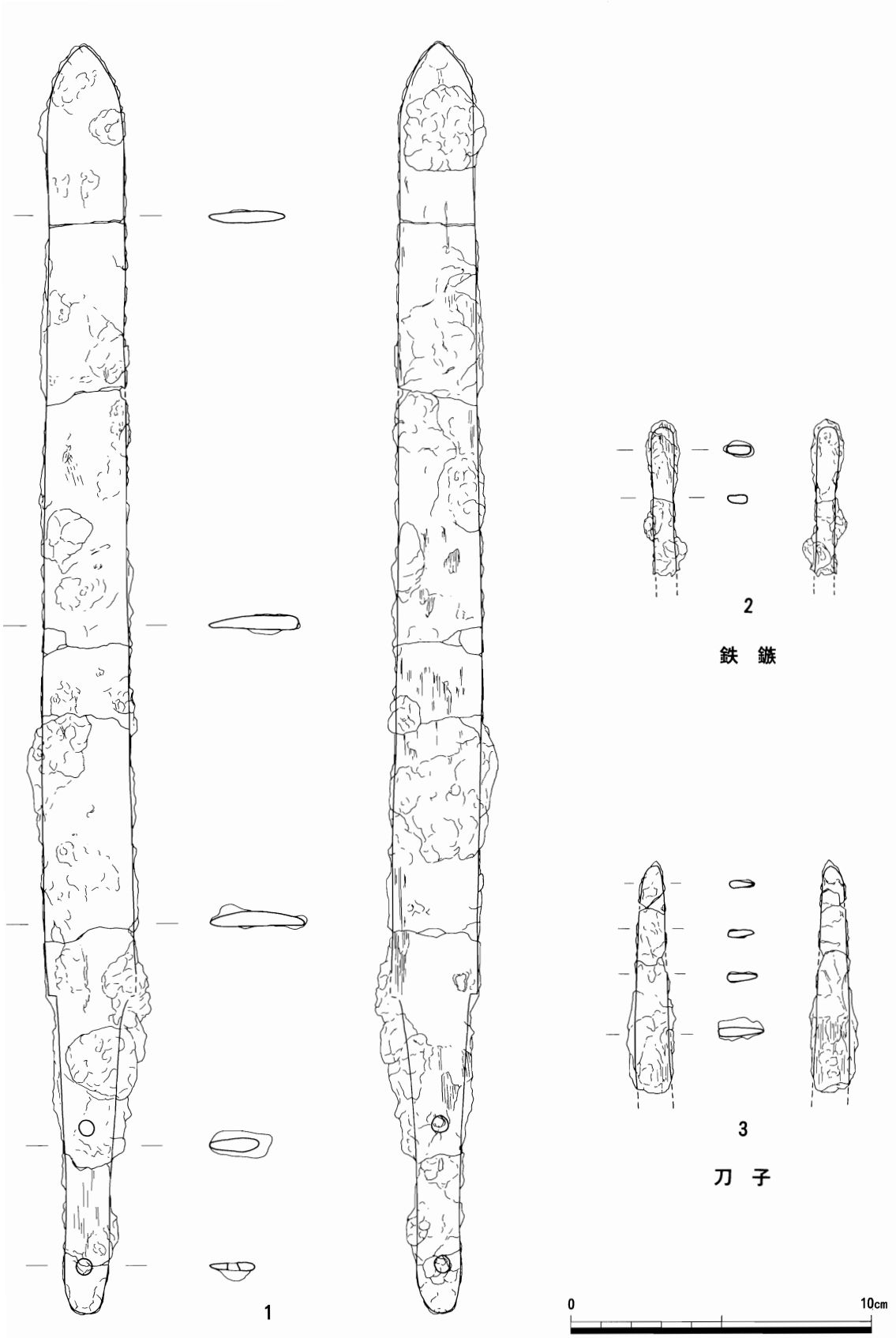
原　喜久子「島根県における古墳時代の鉄鏃について」
『島根考古学会誌』第10集
島根考古学会　1993年



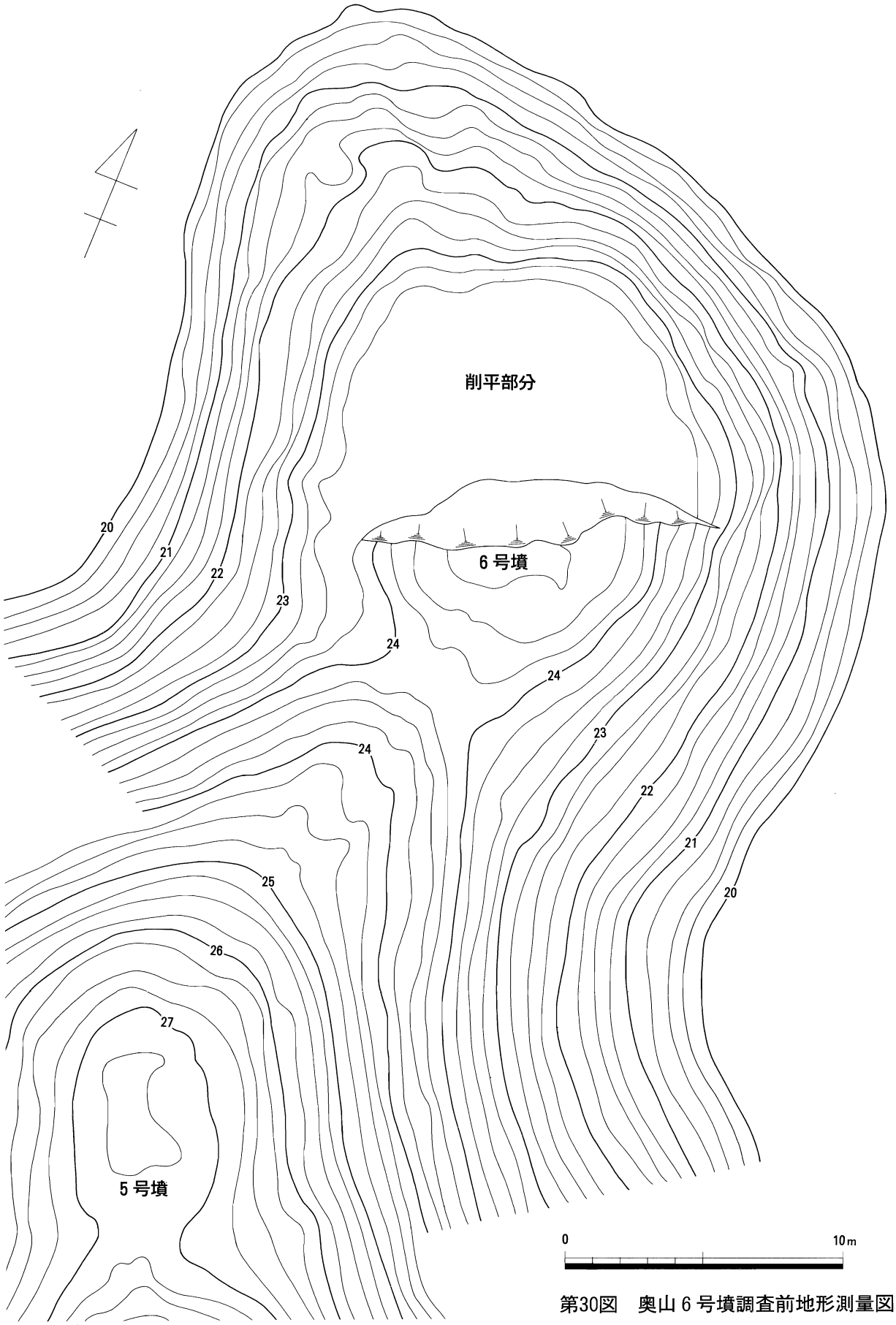
第27図　奥山５号墳小土壙実測図



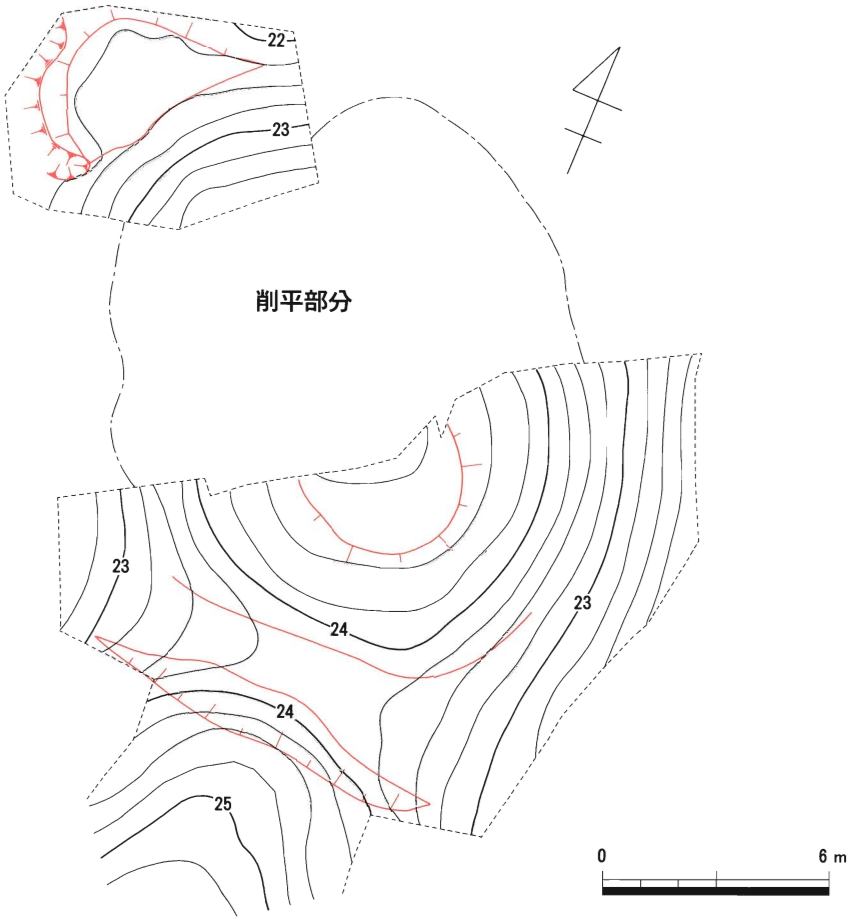
第28図　奥山５号墳出土土師器：直口壷実測図



第29図　奥山５号墳出土鉄製品実測図



第30図　奥山 6 号墳調査前地形測量図



第31図　奥山６号墳調査成果図

（７）６号墳

５号墳より北に降り尾根の先端に位置する。標高25.0ｍで低地を望む見晴らしの良い立地である。

〔概要〕

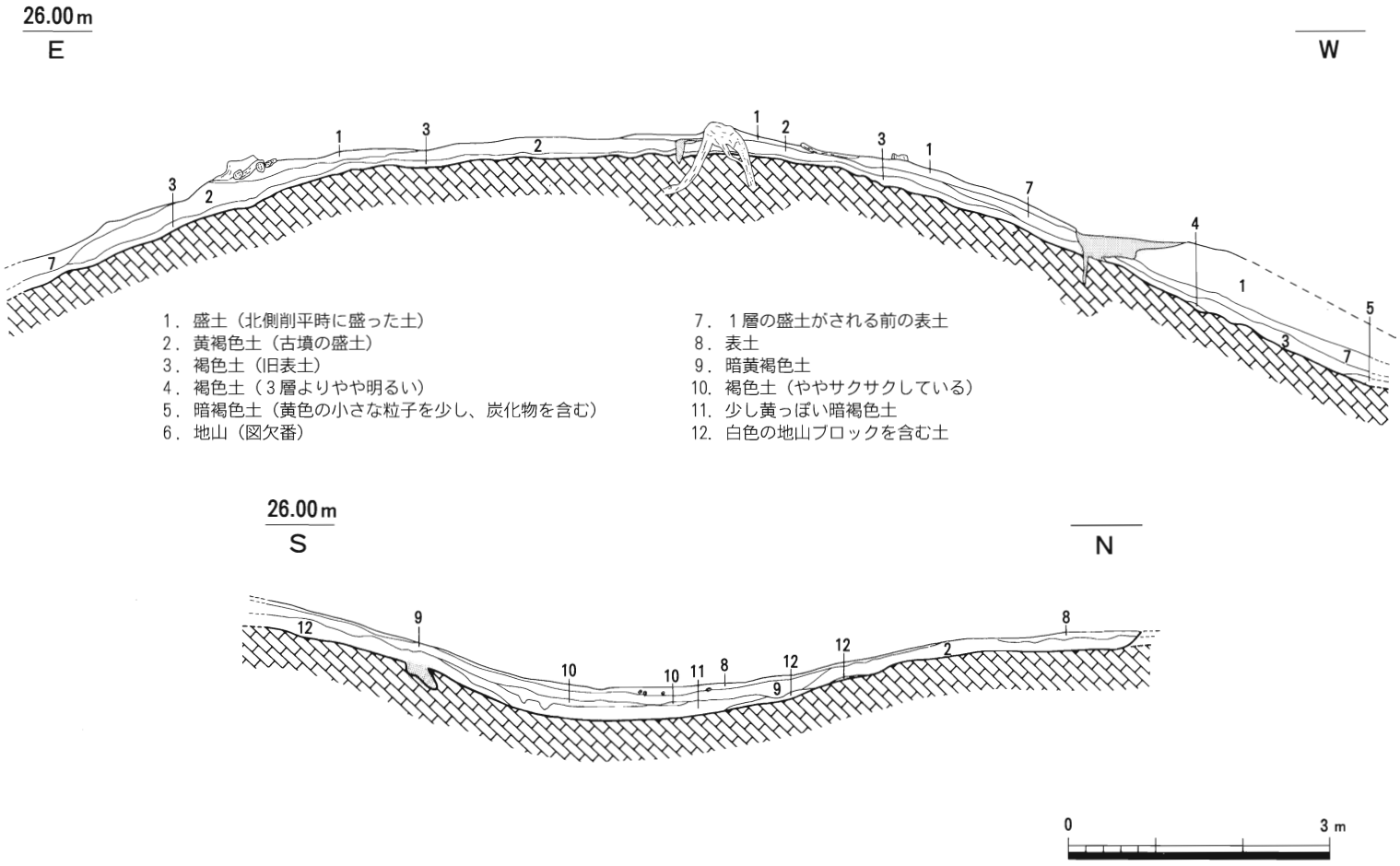
運動公園造成以前にはこの場所に鉄塔が設置されていたようで、墳丘の半分以上は削平されている。主体部もこの部分に設けられていたと思われ、すでに破壊されたものか確認できなかった。

残丘部分の東西土層断面より地山上一層に旧表土を確認した。その直上には厚さ10㎝～20㎝の黄褐色土層が径約11.0ｍにわたって堆積しており、これが古墳の盛土と考えられる。

溝は墳丘南側に切られており、上端幅4.5ｍ、下端幅1.5ｍ～2.4ｍ、深さ0.6ｍ～0.66ｍを測る。断面形は緩やかなＵ字形を呈す。また北側の墳裾には半月状の平坦面を造っており、長さ5.2ｍ、最大幅2.8ｍを測る。残丘部分を調査した限りでは南北約15ｍの円墳ではないかと思われるが、部分的な調査で確かなことは言えないので墳形は不明としておく。

〔時期〕

出土遺物が一点もないため時期は特定できないが、溝に堆積した暗黄褐色土（第32図９層）は５号墳の墳丘盛土が流出したものと思われ、本墳は５号墳に先立ち築造されていた可能性もうかがえるのではないだろうか。



1．盛土（北側削平時に盛った土）
2．黄褐色土（古墳の盛土）
3．褐色土（旧表土）
4．褐色土（３層よりやや明るい）
5．暗褐色土（黄色の小さな粒子を少し、炭化物を含む）
6．地山（図欠番）
7．１層の盛土がされる前の表土
8．表土
9．暗黄褐色土
10．褐色土（ややサクサクしている）
11．少し黄っぽい暗褐色土
12．白色の地山ブロックを含む土

第32図　奥山６号墳墳丘土層断面図

Ⅳ　小　　結

調査の結果、１号墳、５号墳の方墳２基、３号墳、４号墳の円墳２基、２号墳、６号墳の墳形不明２基の計６基と土壙１基を検出した。このうち比較的遺存状態のよかった主要な古墳の墳丘規模は１号墳が6.4ｍ×5.6ｍの方墳、３号墳は直径8.3ｍの円墳、５号墳が南北長12.0ｍの方墳であった。（他はＰ.４の表１に記す）

６基の古墳中、主体部が確認できたのは、１号墳、２号墳、３号墳、５号墳の４基であった。いずれも木棺直葬と思われるが、その痕跡を残すものは１基も確認できなかった。

墓壙の規模に注目して見ると、１号墳、２号墳、３号墳が長軸２ｍ前後の素掘りの墓壙であるのに対し５号墳は様相を異にし、長軸3.6ｍ、短軸2.0ｍと長大で内側に木棺を安置するための掘り込みを持つ２段掘りの墓壙であった。

５号墳の墓壙には底部の南東側に枕石が置かれており本古墳群中で唯一頭位を考察できるものであった。副葬品も６基中唯一納められており、底部よりやや浮いた状態で鉄剣１口、鉄鏃１本、刀子１口が出土している。（但し３号墳は主体部の北側１／３程度を後世に盗掘と思われる撹乱を受けており副葬品があった可能性もあることを書き示しておく。）中期の古墳で枕石を置く例はあまり知られていないが、馬潟町の観音寺２号墳（註１）、八雲村の増福寺20号墳（註２）に見ることができる。いずれも中期後半の築造年代に位置付けられ、墳丘規模、内部主体、出土遺物の様相が古墳群中傑出しており、被葬者が古墳群中かなりの地位にあったであろうと考えられている。このことは５号墳も同様であり、５号墳の被葬者が本古墳群において際立った存在であったことが推測される。

出土遺物は５号墳の副葬品の他、１号墳より土師器の坏３個体、３号墳より鉄剣１口、鉄鏃２本、５号墳より土師器の直口壺１個体が出土している。これらはいずれも築造当時に供献されたものと考えられ、古墳の築造年代を考察しえるものであった。１号墳の土師器の坏と５号墳の土師器の直口壺は松山編年Ⅳ期（註３）の範疇に含まれるもので、築造時期を古墳中期後半と推定される。しかし、１号墳の坏は当該期の坏と比較すると口径の小径化と口縁の内湾が著しい特徴が観察されるため、やや新しい時期に降る可能性も考えられる。３号墳の片刃箭式の長頸式鏃（註４）は、鏃身長が３㎝前後の一般的なタイプのもので、これが最も盛行する山陰須恵器編年のⅠ期（註５）に併行するものと考える。このことより３号墳の築造年代は古墳中期後半と推定される。以上のように遺物の年代観から考察すると１号墳、３号墳、５号墳は同時期に相前後して築造されたものと推測される。築造順序は、比較遺物の種類が不揃のため決定づける根拠が得られなかった。但し１号墳は坏の年代観より３号墳、５号墳よりも後に築造された可能性も考えられる。

また、１号墳出土の土師器の坏は北側の墳裾となる溝底に接し、３個体が並べ置かれた状態で出土しており、葬送の祭祀が執り行われたことが窺われる。近隣でこのように土師器の坏を並べ置く例は八雲村の増福寺24号墳（註２）に見られ、土師器の高坏を並べ置く例は同村の増福寺２号墳（註６）、23号墳と東出雲町の渋山池３号墳（註７）に見ることができる。いずれも中期後半の築造年代に位置

付けられており、墳丘上で行われた土器供献行為の他に、墳裾、溝内でも祭祀行為が行われるようになったとも考えられている。よってこれらは当該期における祭祀行為の変様を解明するうえでの貴重な資料となり得るものであろう。

被葬者については前述のごとく5号墳が他を圧しているのは言うまでもないが、3号墳は本古墳群最高所に立地し、鉄剣、鉄鏃といった武器類が供献されていることから、これも重要な位置にあったのではないかと思われる。また本古墳群北端に立地する6号墳は、後世の削平により墳丘の半分以上を失っており、墳丘規模の推定調査に留まったが、その規模径15mの円墳であったのではないかと推測される。そのため6号墳は本古墳群最大規模になる様相であり、5号墳と同等以上の被葬者が埋葬された可能性があり注意される。

本古墳群を形成する集団は、これまで発見された周辺の中期古墳を考察に加え、墳丘規模、副葬品、供献品の質的、量的な観点から見ると際立った特徴も見られず、地域を掌握するような強い権力集団とは考え難い。むしろ当地を掌握する豪族集団と主従関係にあり、周辺の谷部で農耕などを生産基盤として生活し累代的に営まれた小規模な地域集団ではないだろうか。

また運動公園造成以前の本古墳群周辺の地形は、西方に南北に伸びる田園地帯が広がり幅の広い谷地形を呈していた。ここに生活基盤があったのではないかと考えられる。東方は幅狭な尾根筋が南北に伸びていた。この尾根筋は本古墳群と小規模な谷続きになっており、7号墳の南西に位置する標高40mの丘陵上で合流する。ここにも何基かの古墳が存在していた可能性があり、本古墳群の規模はもう少し拡大していただろうと考えられる。

今回の調査では、削平のため6号墳の全容が摑めなかったことなど惜しまれる点もあるが、一方で1号墳、3号墳、5号墳といった比較的遺存状態の良い古墳にも恵まれ、本古墳群の実態について主要な部分を明らかにでき、今後乃木地区の古墳時代中期の墓制を検討していくうえで貴重な資料を得ることができたものであった。

参考文献

註1　「Ⅱ　松江・観音寺古墳群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅳ集　島根県教育委員会社会教育課　昭和47年3月
註2　『増福寺古墳群発掘調査報告書　昭和56年度』八雲村教育委員会　昭和57年3月
註3　松山智弘　「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌』第8集　島根考古学会　1991年
註4　原喜久子　「島根県における古墳時代の鉄鏃について」『島根考古学会誌』第10集　島根考古学会　1993年
註5　山本　清　「山陰の須恵器」『島根大学開学10周年記念論文集』1960年
註6　『増福寺古墳群発掘調査報告書　昭和55年度』八雲村教育委員会　昭和56年3月
註7　『渋山池古墳群』　建設省松江国道工事事務所　島根県教育委員会　1998年3月
『古曽志遺跡群発掘調査報告書―朝日ヶ丘団地造成に伴う発掘調査―』島根県教育委員会　1989年
『山崎古墳』松江市教育委員会　1984年3月

図　　版

1 号墳調査前全景
（南東より）

1 号墳主体部検出状況

1 号墳主体部土層断面

図版 2

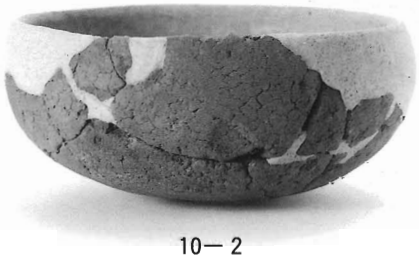
1 号墳主体部完掘状況

1 号墳土師器：坏出土状況
（左下）

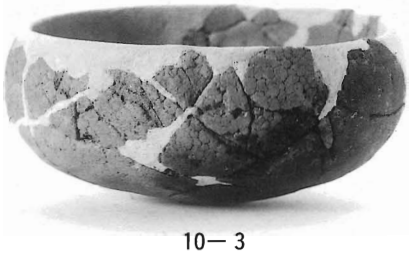
1 号墳土師器：坏出土状況

1 号墳完掘状況（北より）

10－ 1



10－ 2



10－ 3

1 号墳出土土師器：坏

図版 4

2 号墳調査前全景
（北より）

2 号墳主体部検出状況

2 号墳主体部土層断面

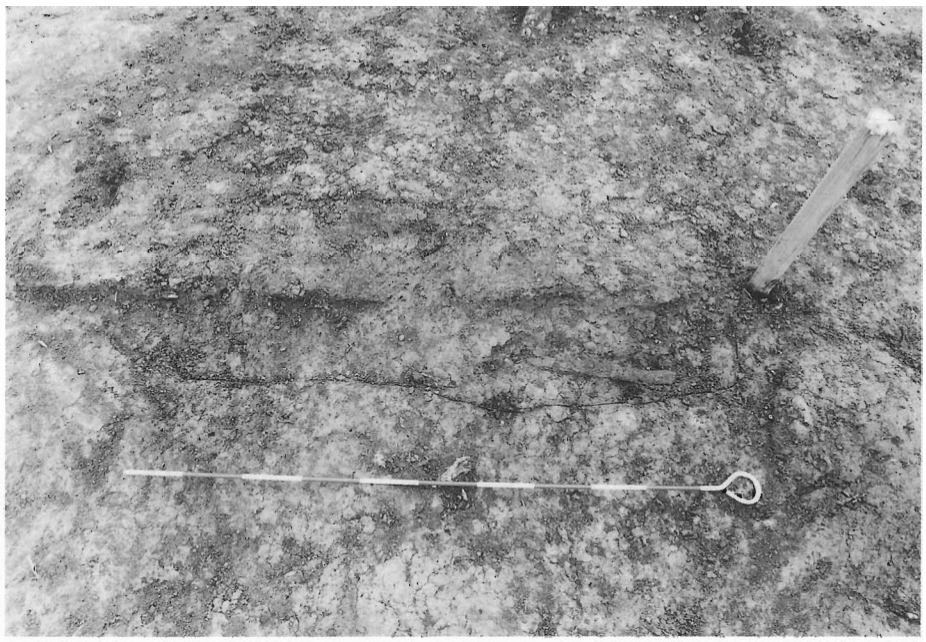
2 号墳主体部完掘状況

2 号墳墳丘東側土層断面

2 号墳完掘状況遠景
（北より）

図版 6

3 号墳調査前全景
（南より）



3 号墳主体部検出状況

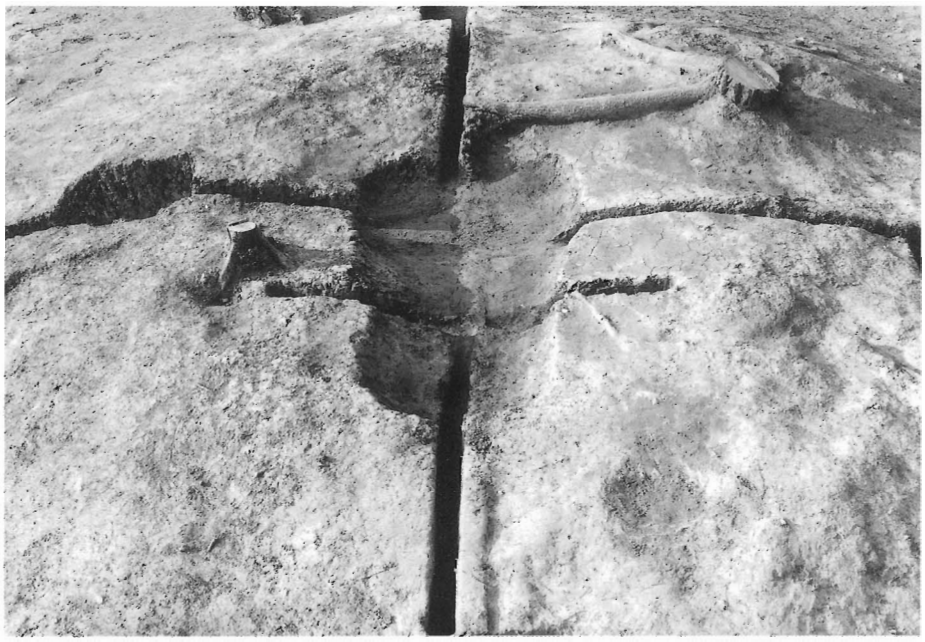
3 号墳鉄製品出土状況
（鉄剣・鉄鏃）

3 号墳主体部土層断面（南北）

3 号墳主体部土層断面（東西）

図版 8

3 号墳主体部盗掘擴完掘状況



3 号墳主体部完掘状況

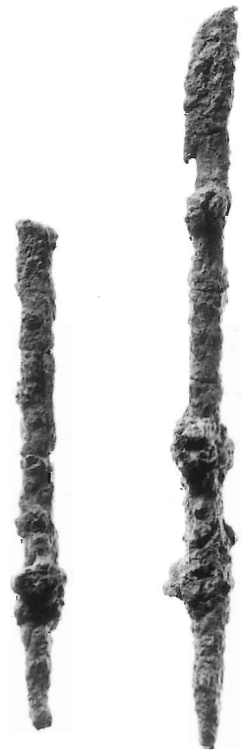
3 号墳西側墳裾土層断面

3 号墳完掘状況遠景（南東より）

3 号墳完掘状況近景（南東より）

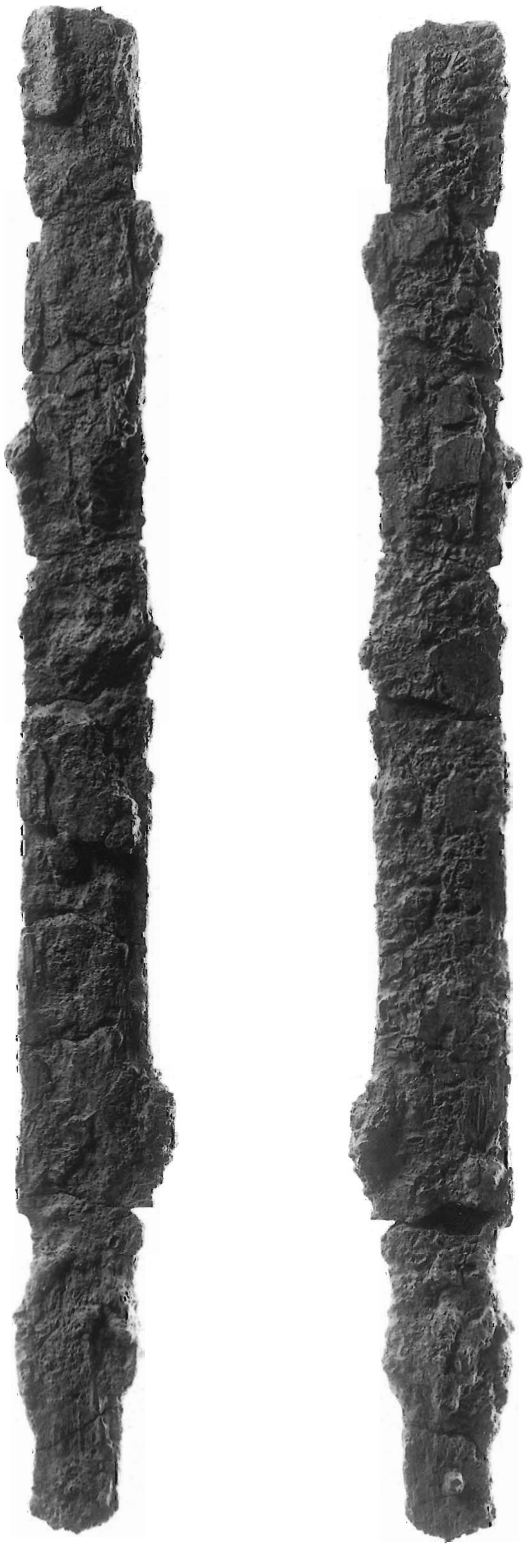
図版10

3 号墳墳丘基盤（南東より）

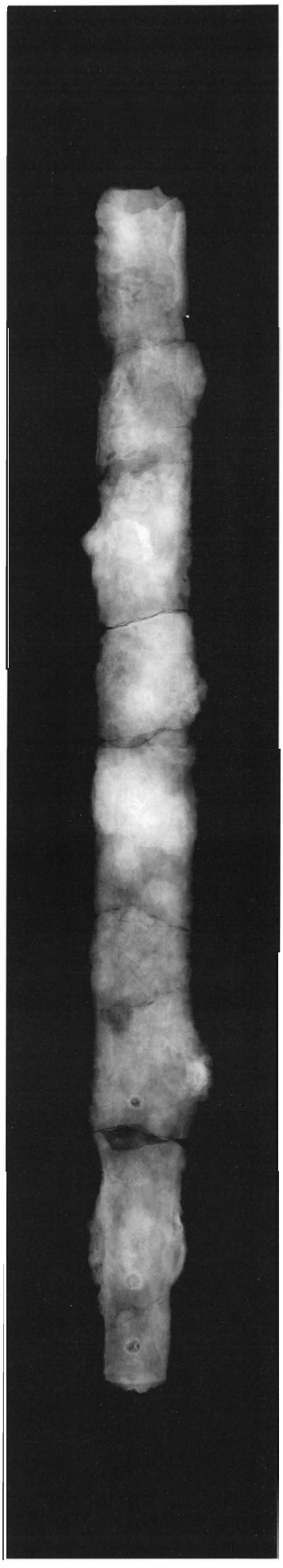


18－3　18－2

3 号墳出土鉄製品：鉄鏃



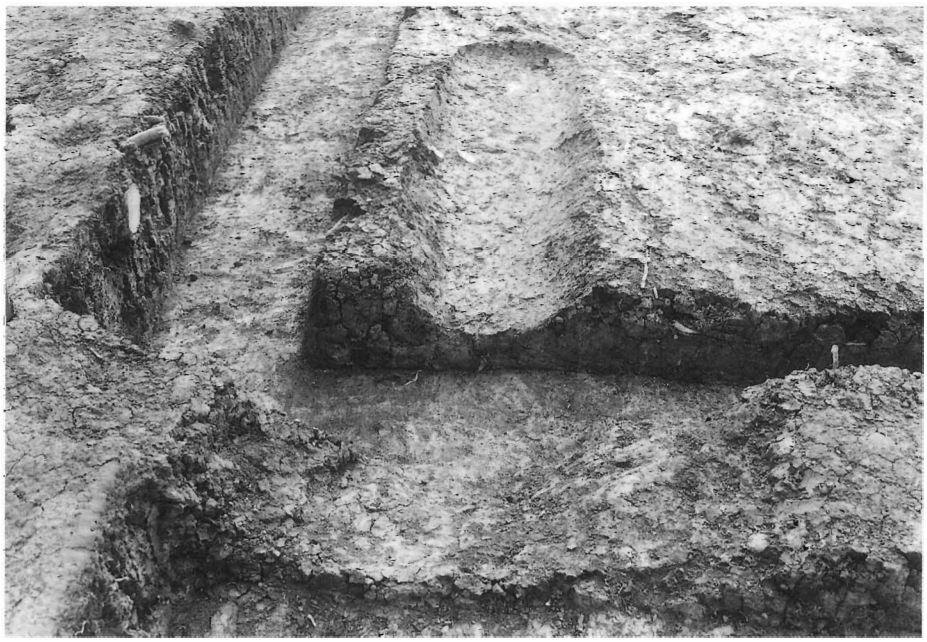
18－1



3号墳出土鉄製品：鉄剣

図版12

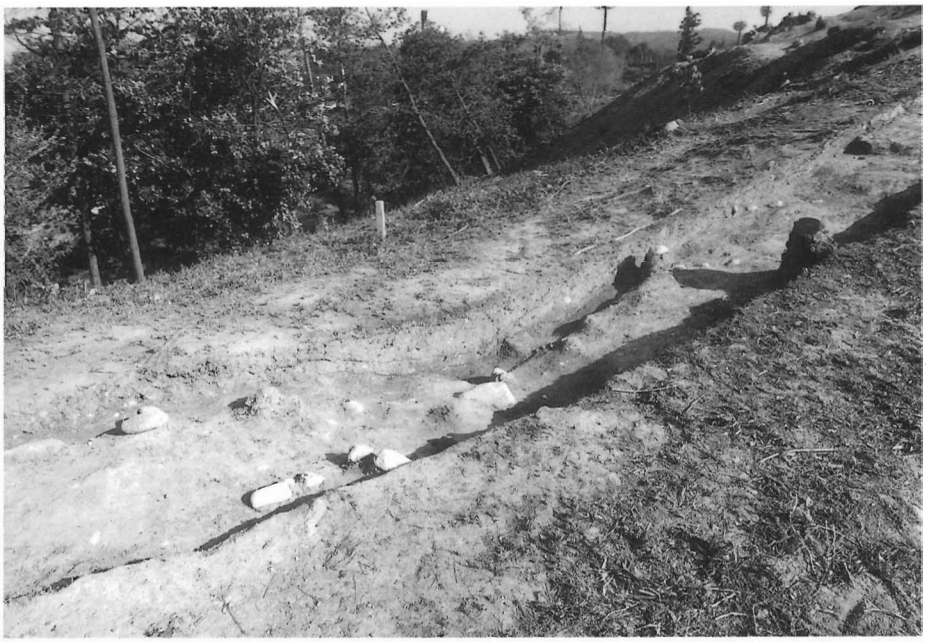
ＳＸ－01検出状況



ＳＸ－01完掘状況
（北北西より）

ＳＸ－01完掘状況
（南より）

4号墳調査前全景
（南より）



4号墳南側の溝検出状況

4号墳南側の溝完掘状況

図版14

4 号墳完掘状況
（南西より）

5 号墳調査前全景
（南東より）

5 号墳主体部検出状況

5号墳主体部土層断面（東西）

5号墳主体部土層断面（南北）

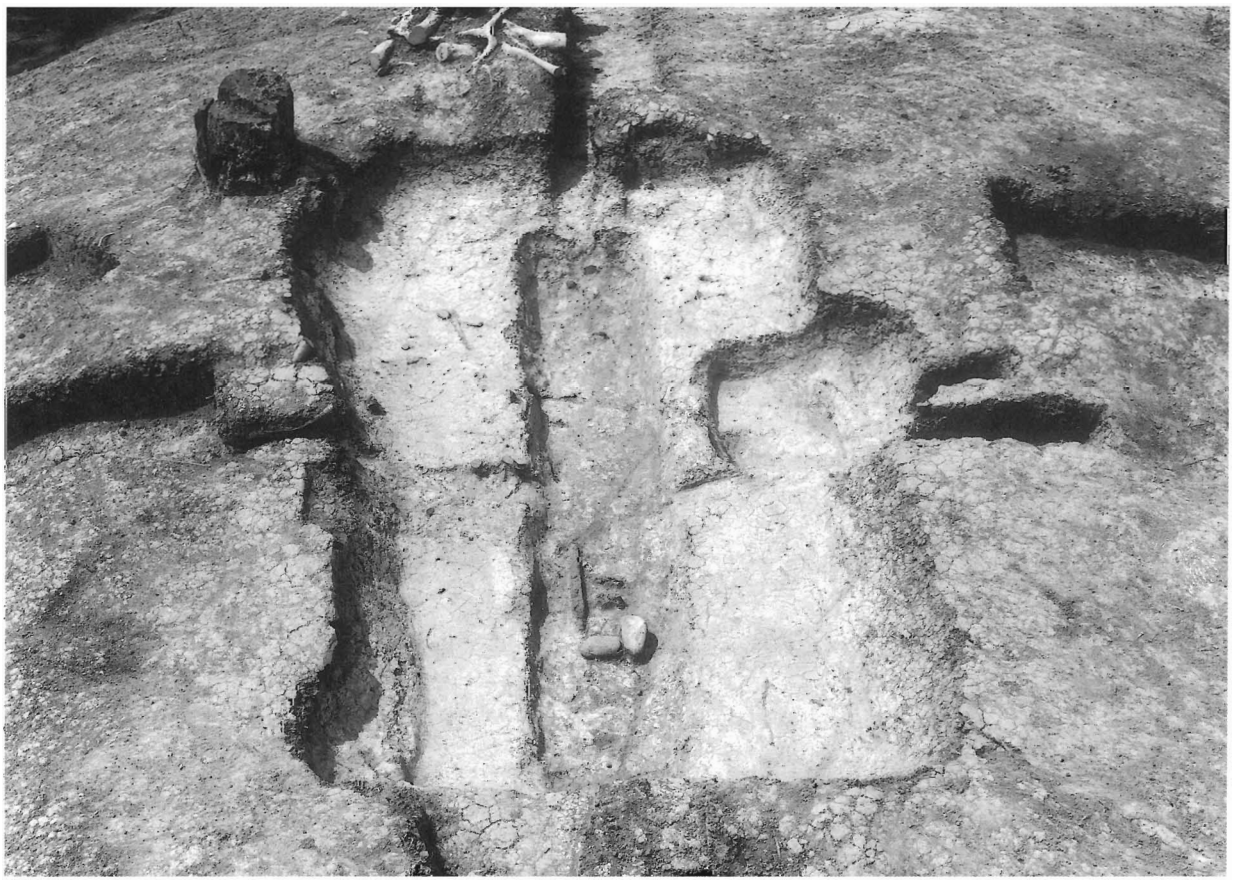
図版16

5 号墳土師器：直口壷出土状況

5 号墳鉄剣出土状況

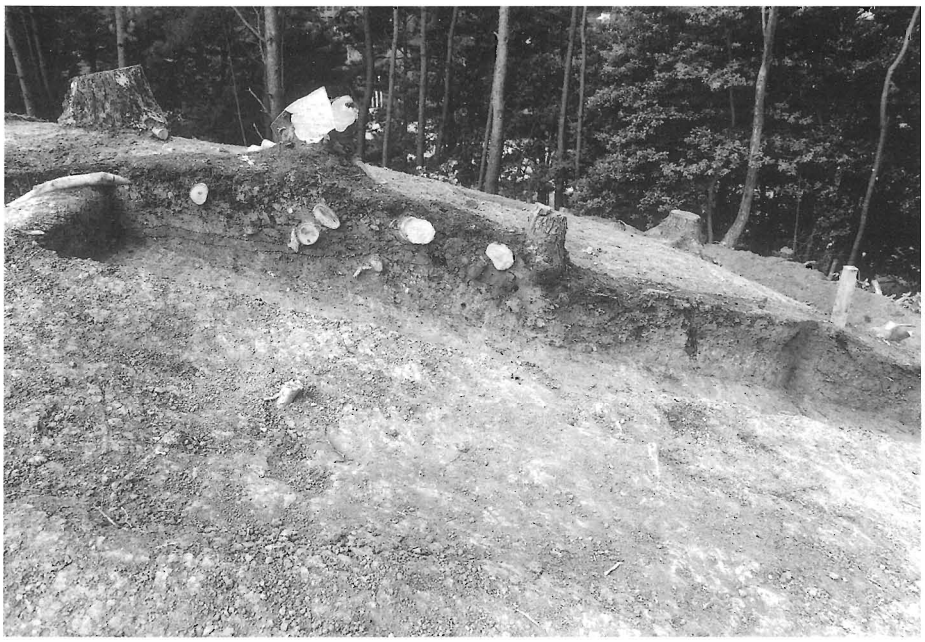
5 号墳刀子出土状況

5号墳　鉄剣、鉄鏃、石出土状況



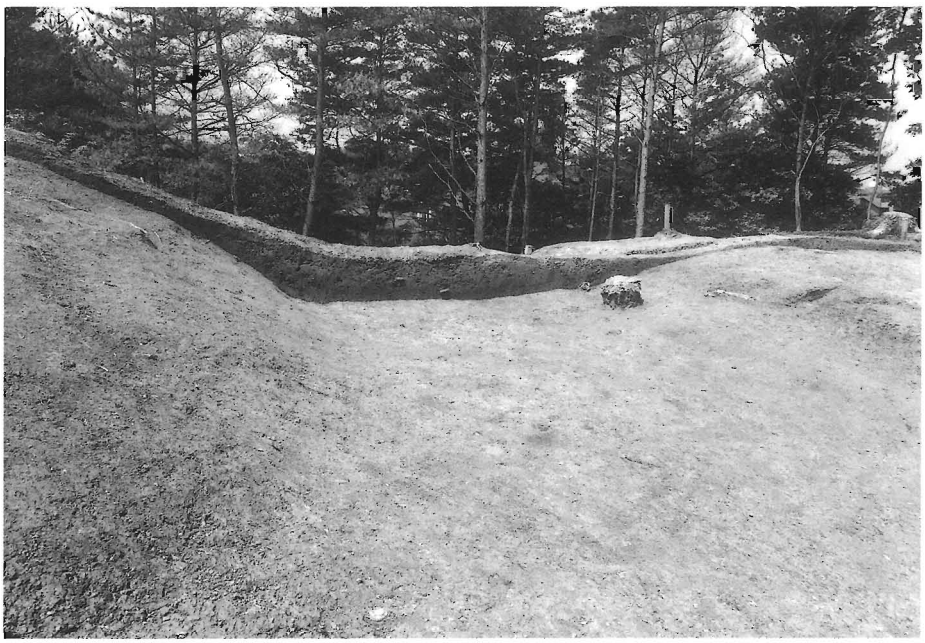
5号墳主体部完掘状況（北東より）

図版18

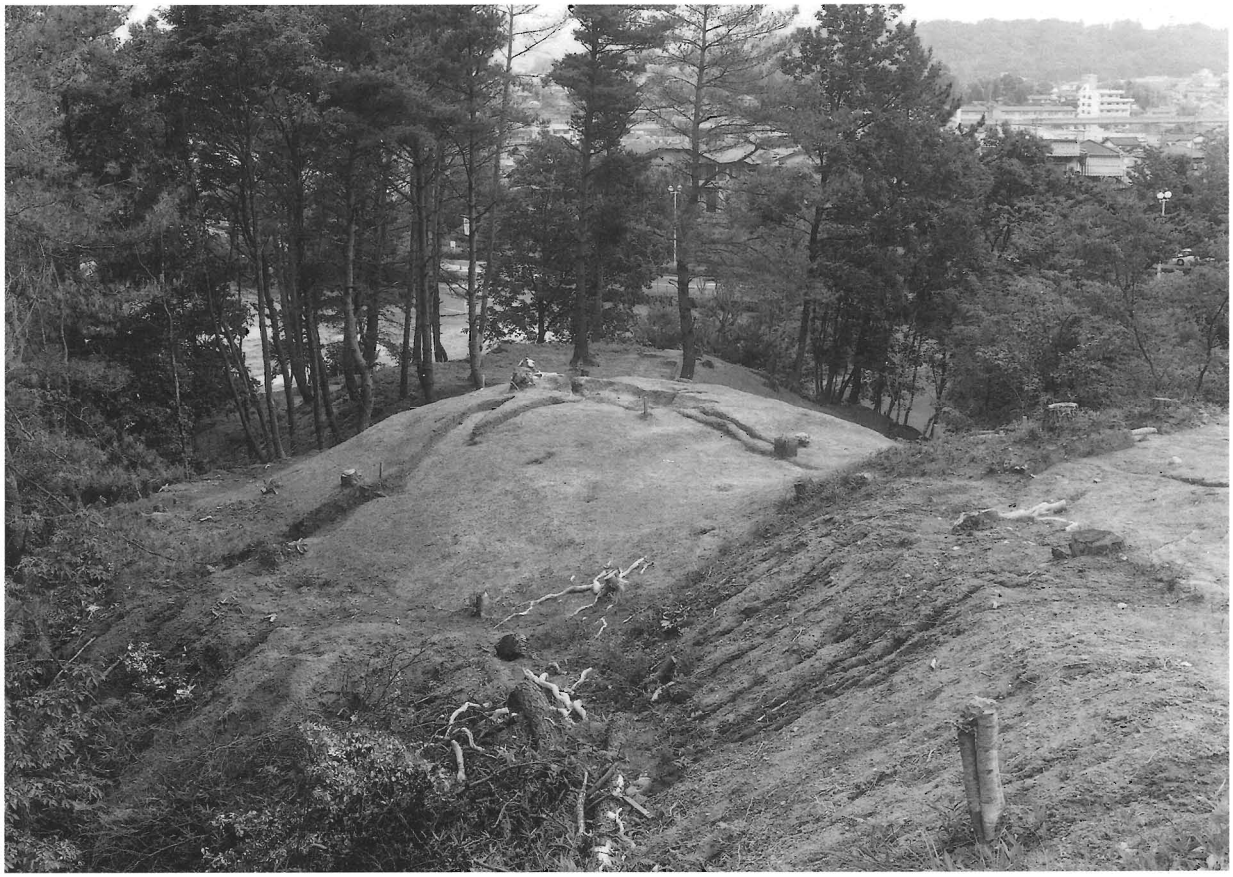


5号墳墳丘北側土層断面

5号墳墳丘南側の溝土層断面



5号墳墳丘南側の溝検出状況



5号墳完掘状況遠景（南より）

5号墳完掘状況近景（南東より）

図版20

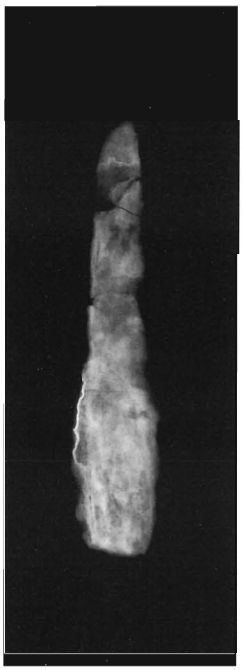
5 号墳墳丘基盤
（南より）

5 号墳小土壙検出状況

5 号墳小土壙完掘状況

28－1

5号墳出土土師器：直口壷

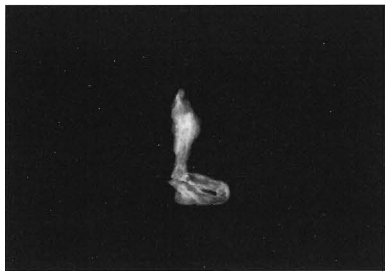


29－3

刀子

29－2

鉄鏃

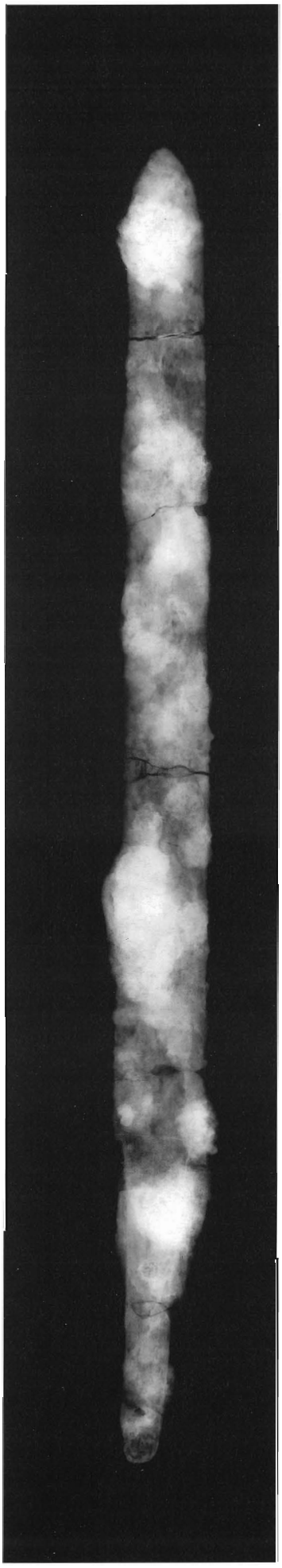


不明鉄器

5号墳出土鉄製品

図版22

29－1



5号墳出土鉄製品：鉄剣

6 号墳調査前全景
（南より）

6 号墳南側の溝検出状況

6 号墳南側の溝完掘状況

図版24

6 号墳墳丘西側墳裾完掘状況

6 号墳完掘状況遠景
（南より）

6 号墳完掘状況近景
（南東より）

報告書抄録

ふりがな	おくやまこふんぐんはっくつちょうさほうこくしょ
書名	奥山古墳群発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松江市文化財調査報告書
シリーズ番号	第90巻
編著者名	広江光洋
編集機関	松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団
所在地	〒690－8540　島根県松江市末次町86番地　TEL　0852（55）5294
	〒690－0886　島根県松江市母衣町180－21　TEL　0852（28）2065
発行年月日	2001年（平成13年）9月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
奥山古墳群（おくやまこふんぐん）	島根県（しまねけん）松江市（まつえし）上乃木（あげのぎ）	32201	D-026			2000.12.4～2001.6.25	1,800㎡	土地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
奥山古墳群	古墳	古墳時代中期	古墳	土師器（壷、坏） 鉄製品 （剣、鏃、刀子）	

奥山古墳群発掘調査報告書

2001年9月

発　行　松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

印　刷　㈲黒　潮　社
松江市向島町182－3